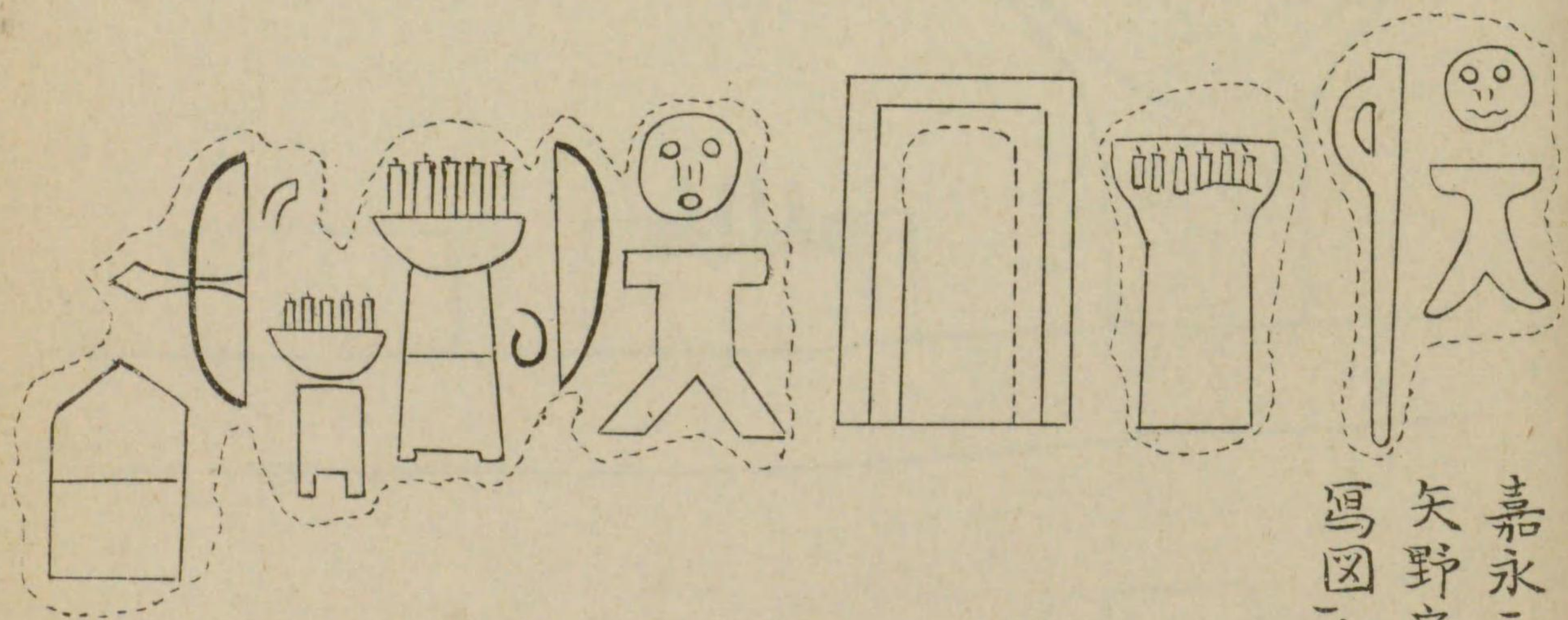
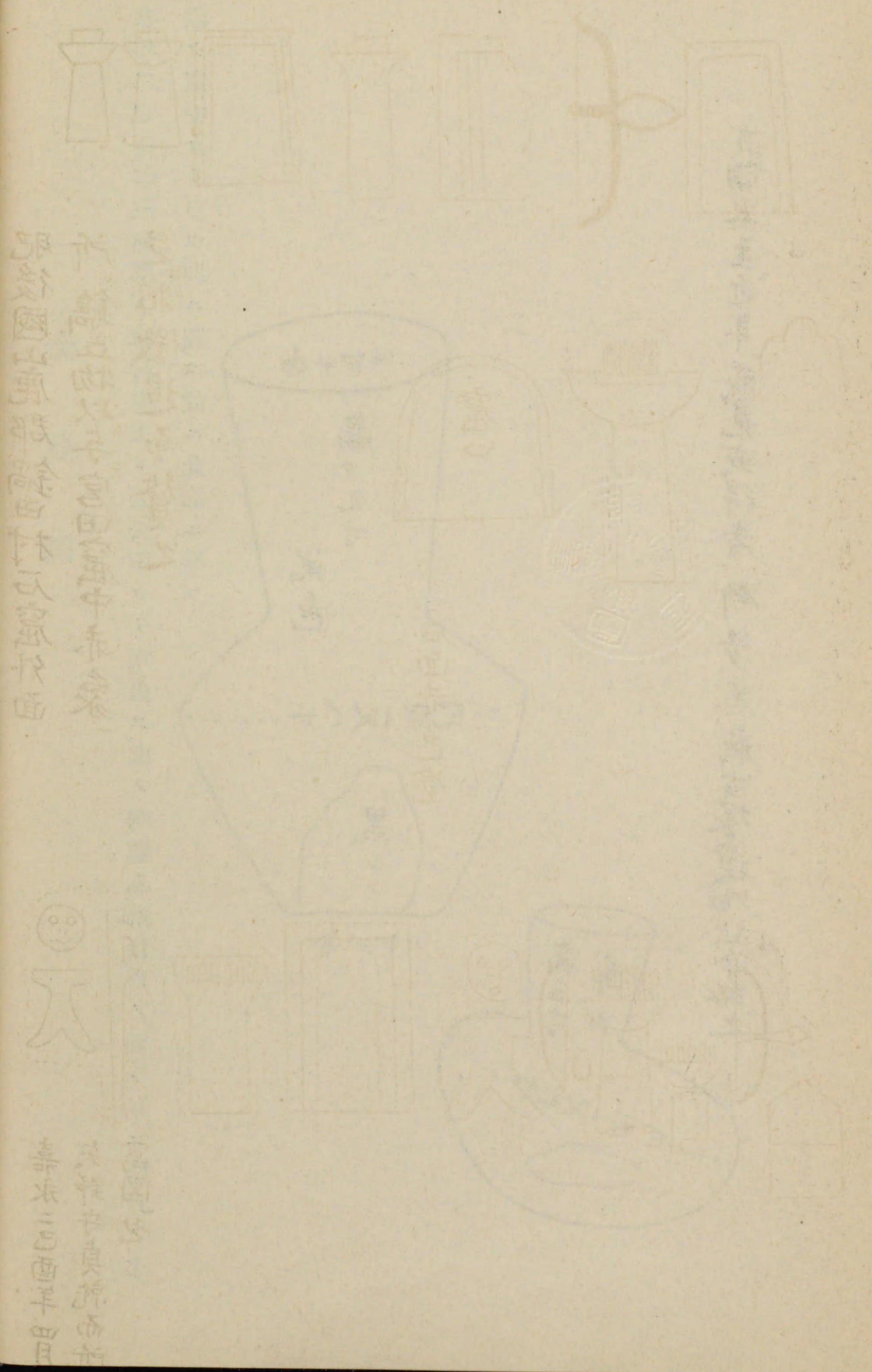


石面赤色塗

肥後國山鹿郡鍋田村石窟外面  
 所鑿立物以与宮田窟中赤象  
 足相徵追而整之

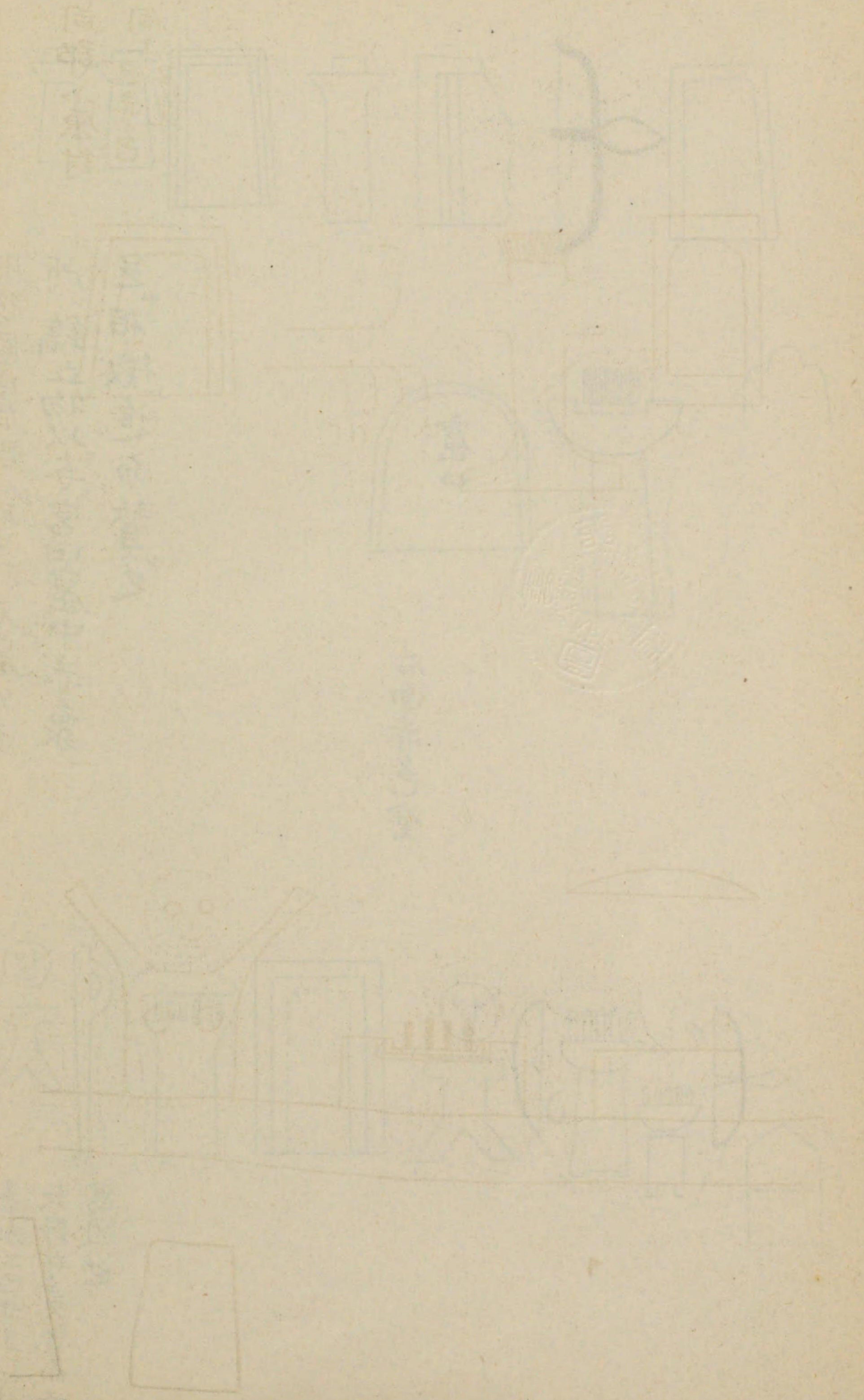
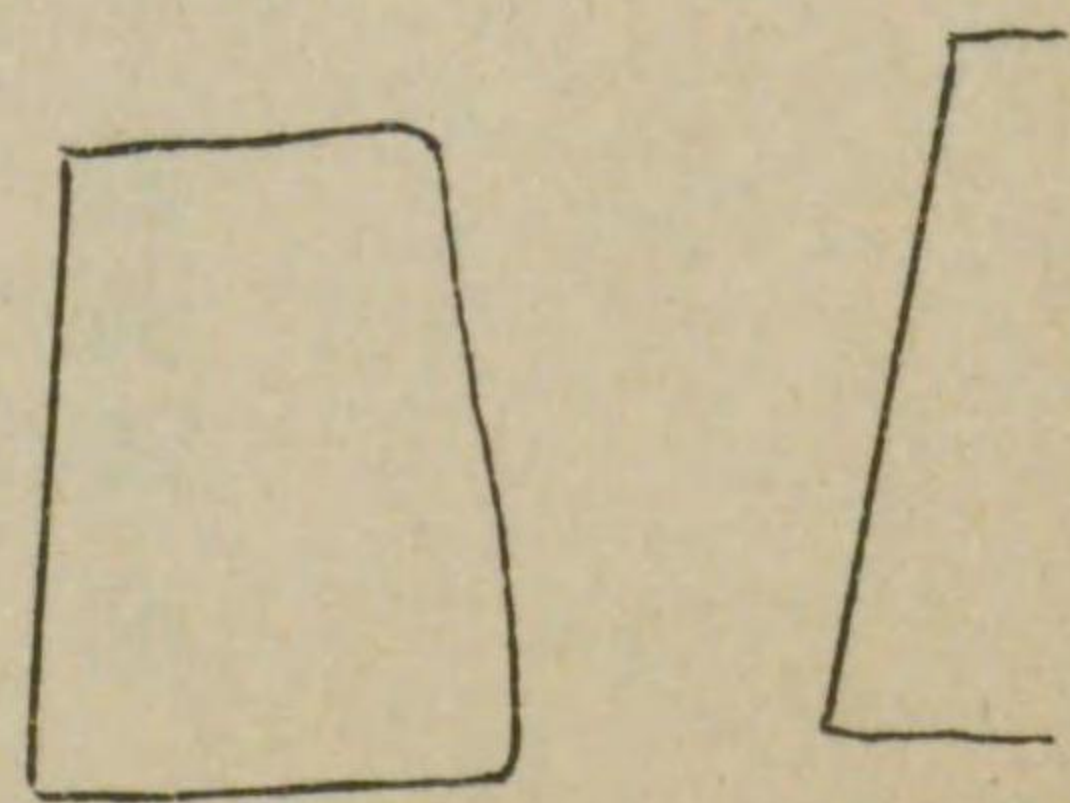
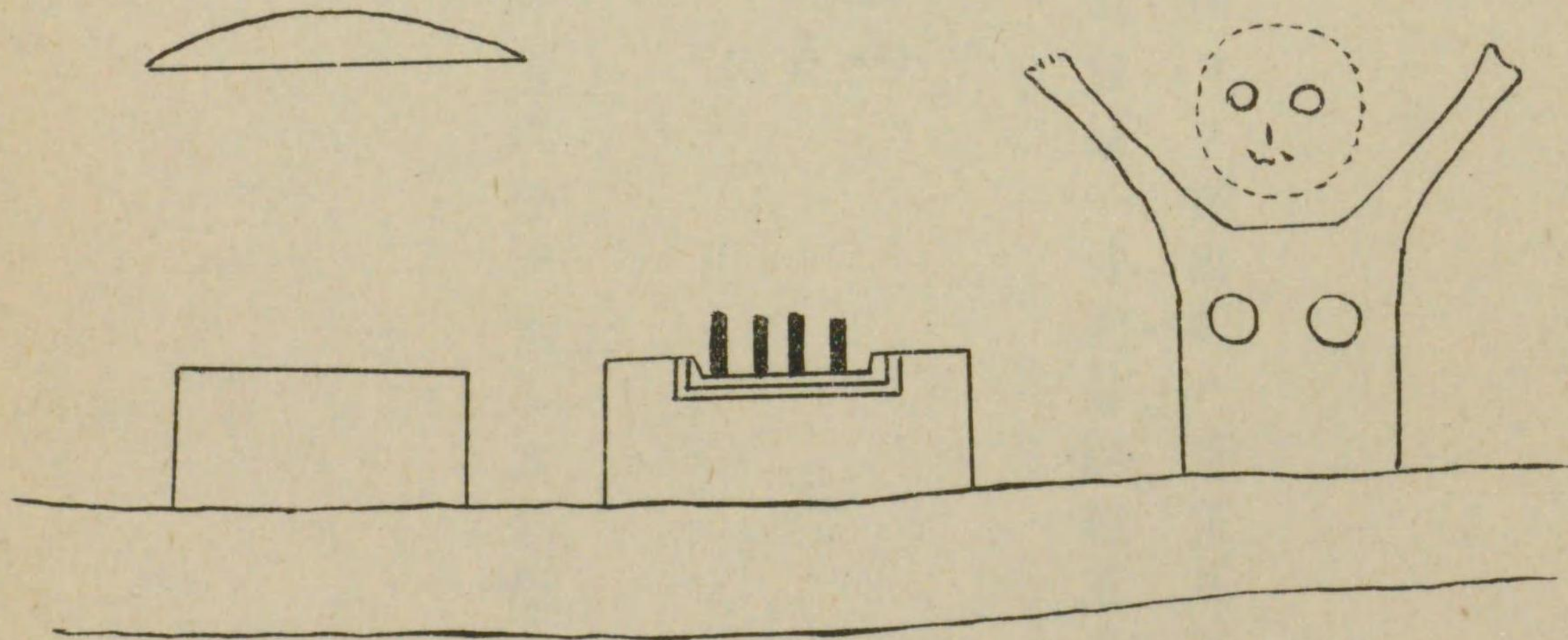
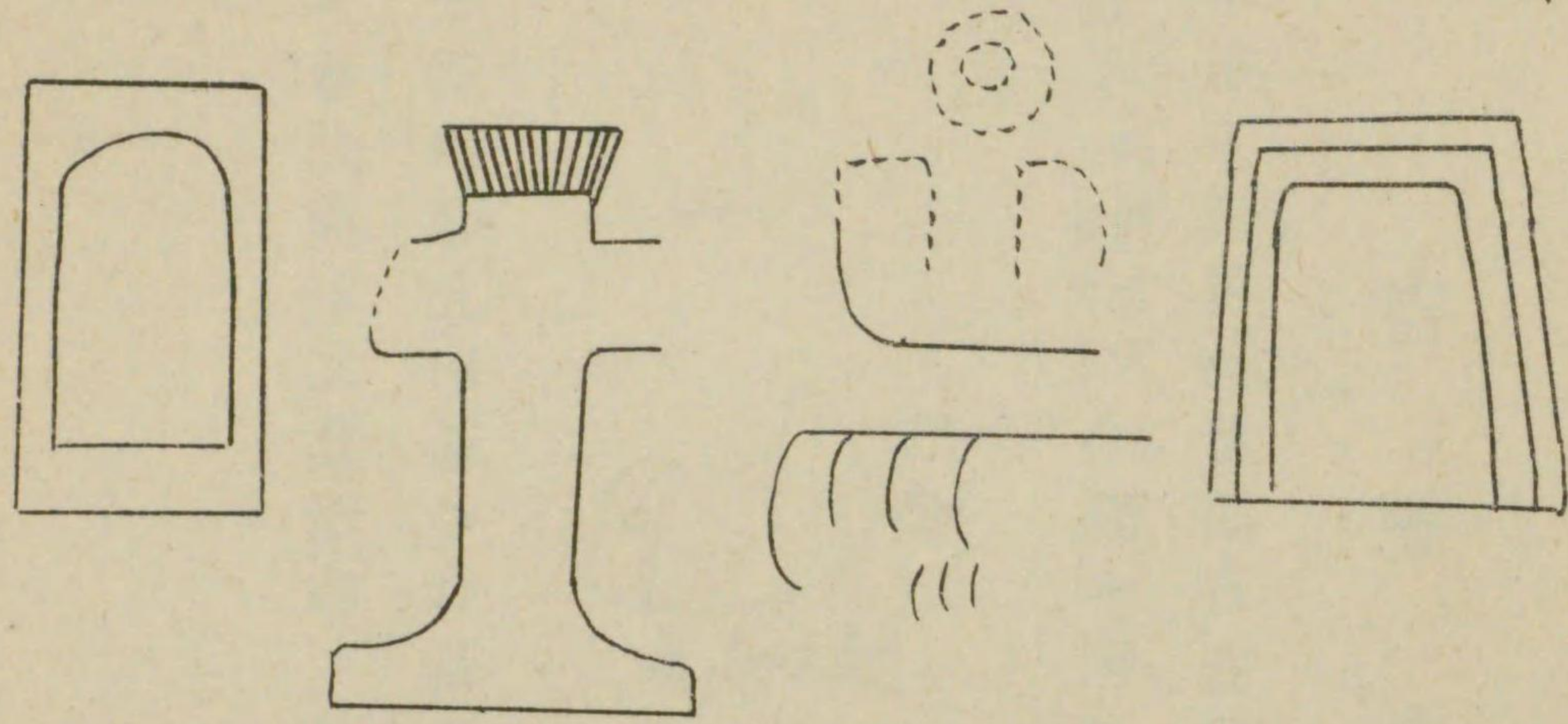


嘉永三己酉年四月  
 矢野守貞就而所  
 寫圖也





同郡小原村  
同上但赤色  
不見

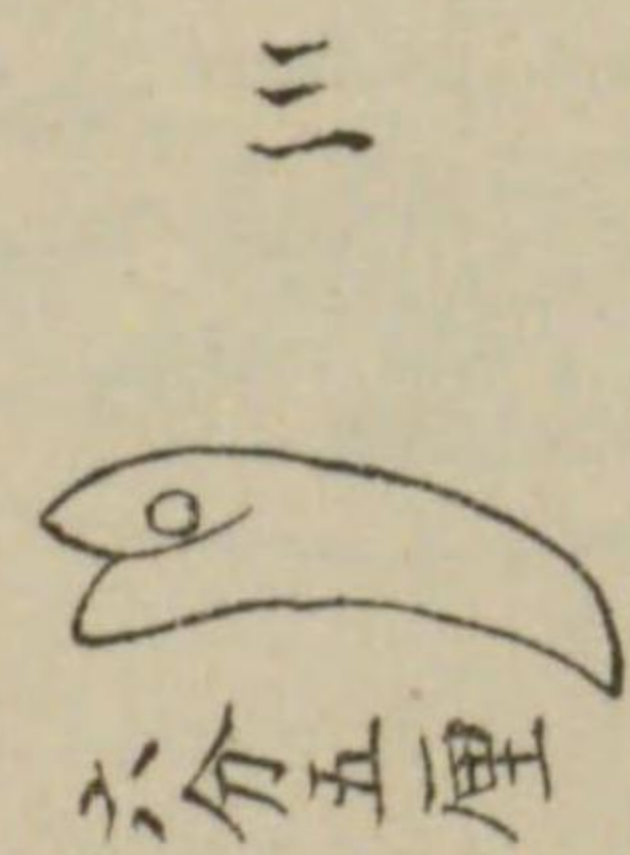
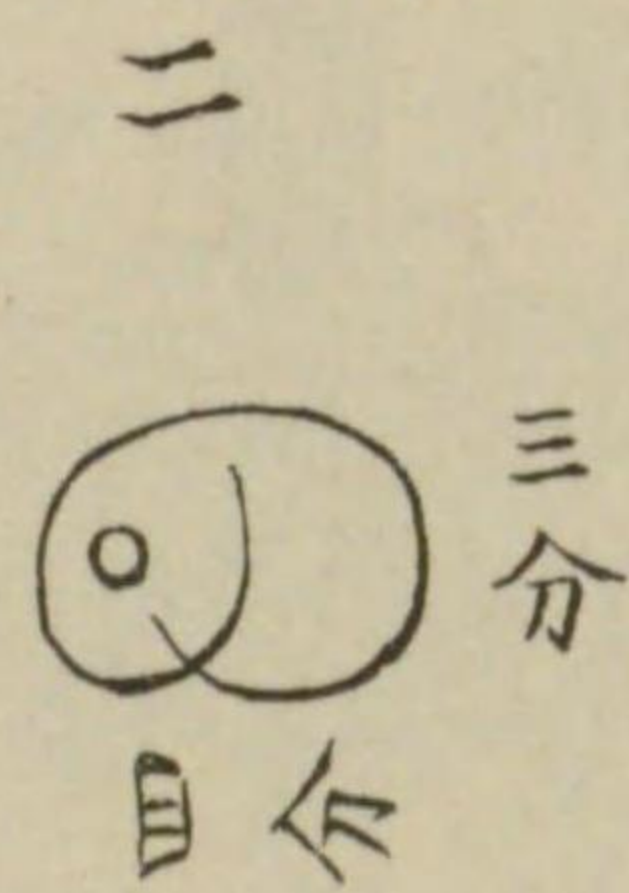
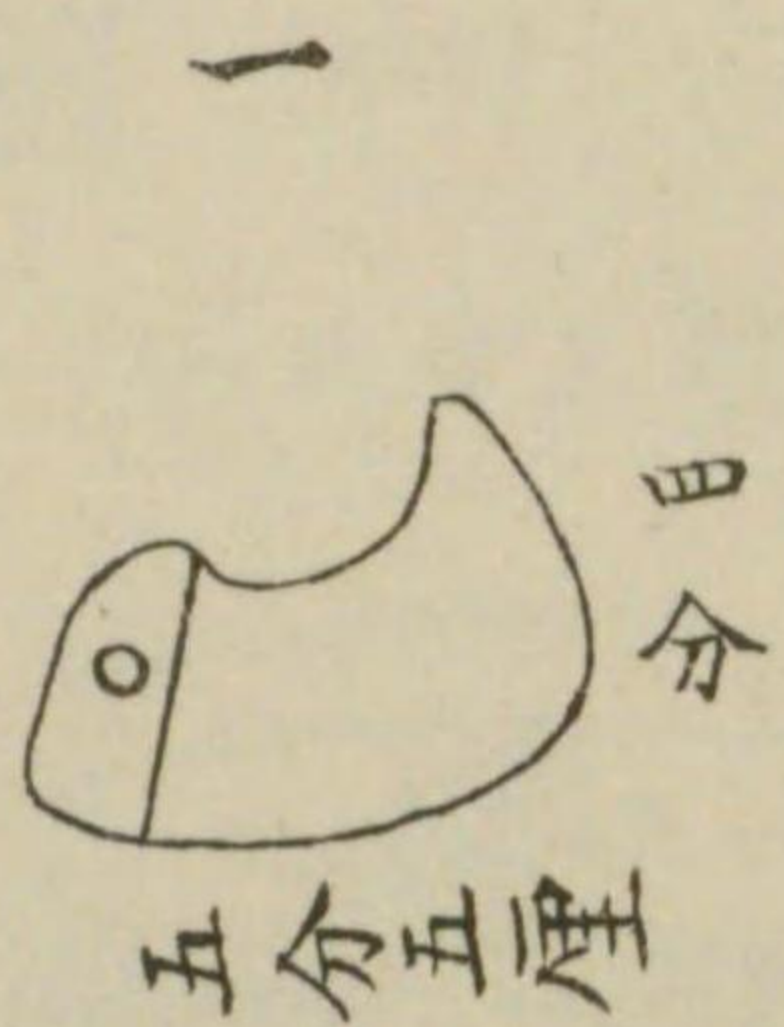




追加

吉井古玉

元治元年甲子四月、生葉郡吉井町ノ者天神町善右衛門扇島ト云所ヨリ掘出所ノ青玉、凡三千顆此内諸所へ配分ス、内曲玉十枚アリ今殘ル所二千三百八十三箇、管玉最大者長一寸七分、圓徑五分五厘、其次長

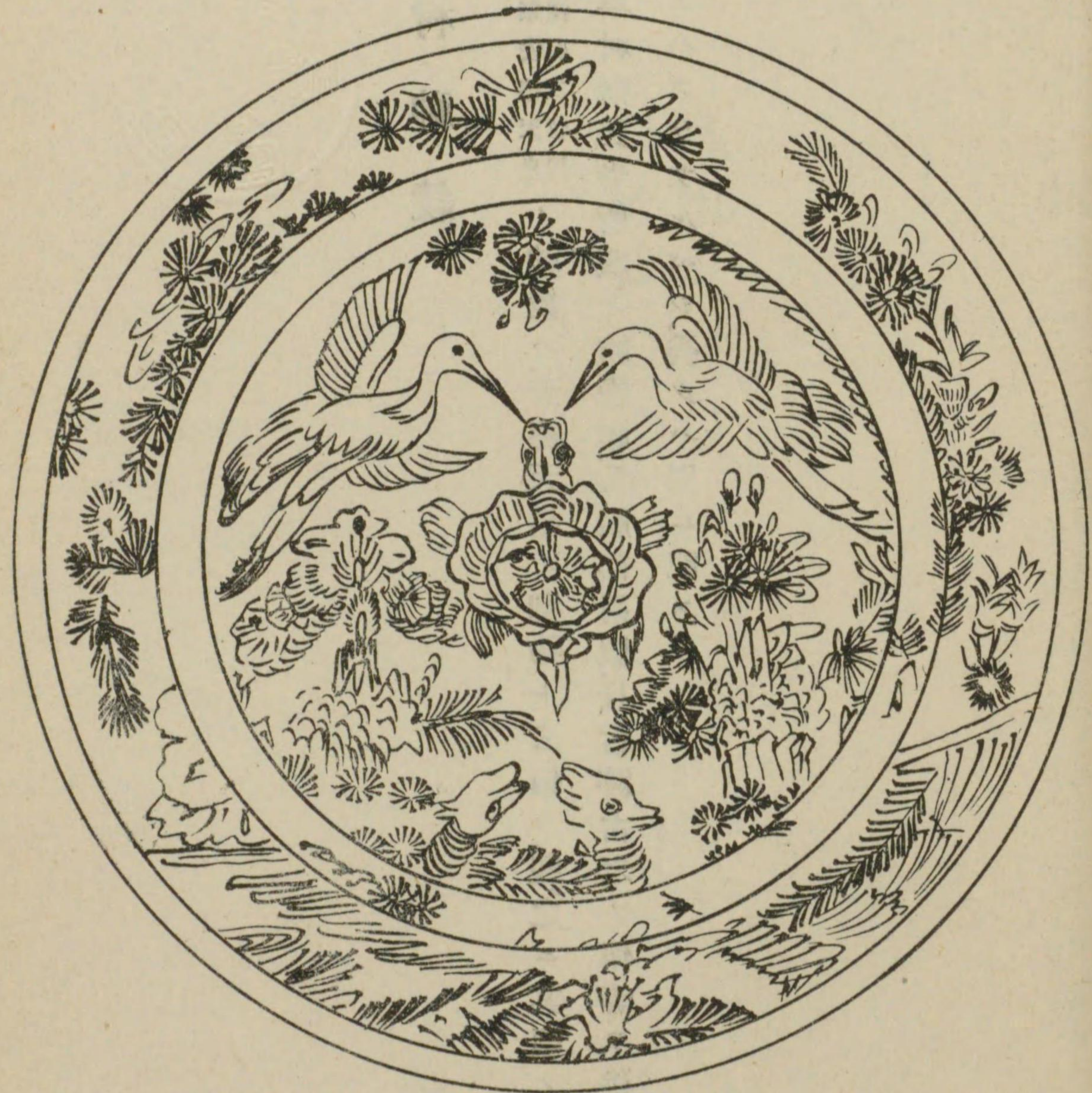


一寸四分、徑四分五厘、最小者長二分、徑一分、圓玉大者周一寸五六分ナルニ、其他極テ小者三十五、異形ナル者ニ、曲玉ニ、其形、右ノ如シ

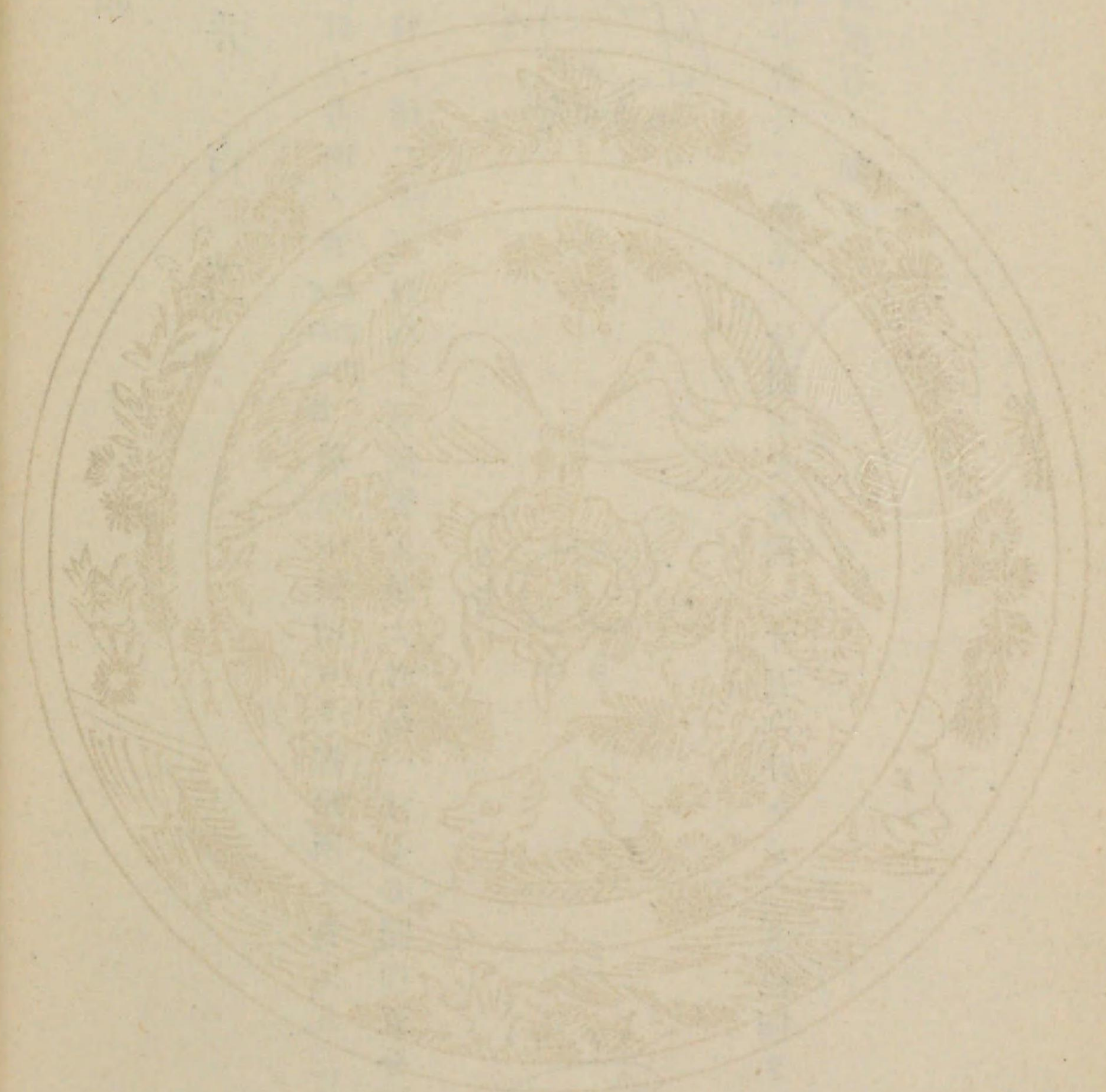


大如圖

徑三寸八分



大如圖



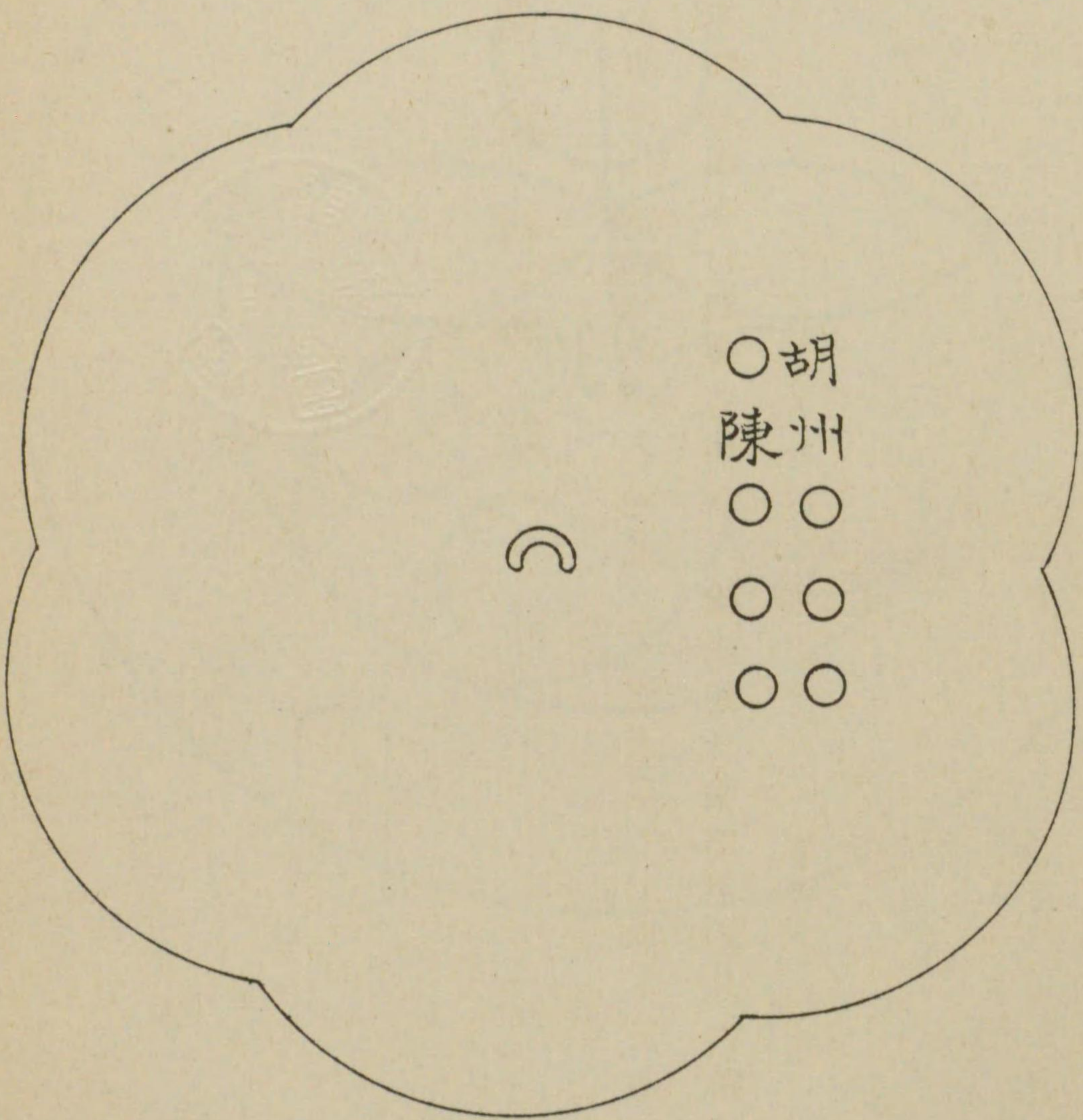


常持村神鏡

山本郡常持莊前大明神所祭安德天皇  
平清盛二位尼ノ神鏡ハ、安德天皇ノ御物ト云傳フ、觀之ニ其頃ノ物ナル  
コトハ論ナシ、平家物語山本村觀興寺所藏ノ繪縁起及服部系圖、且古跡古老ノ傳等ヲ併考フル  
ニ、社家ノ傳説浮タルコトニハアラサルベシ、委クハ別ニ記ス

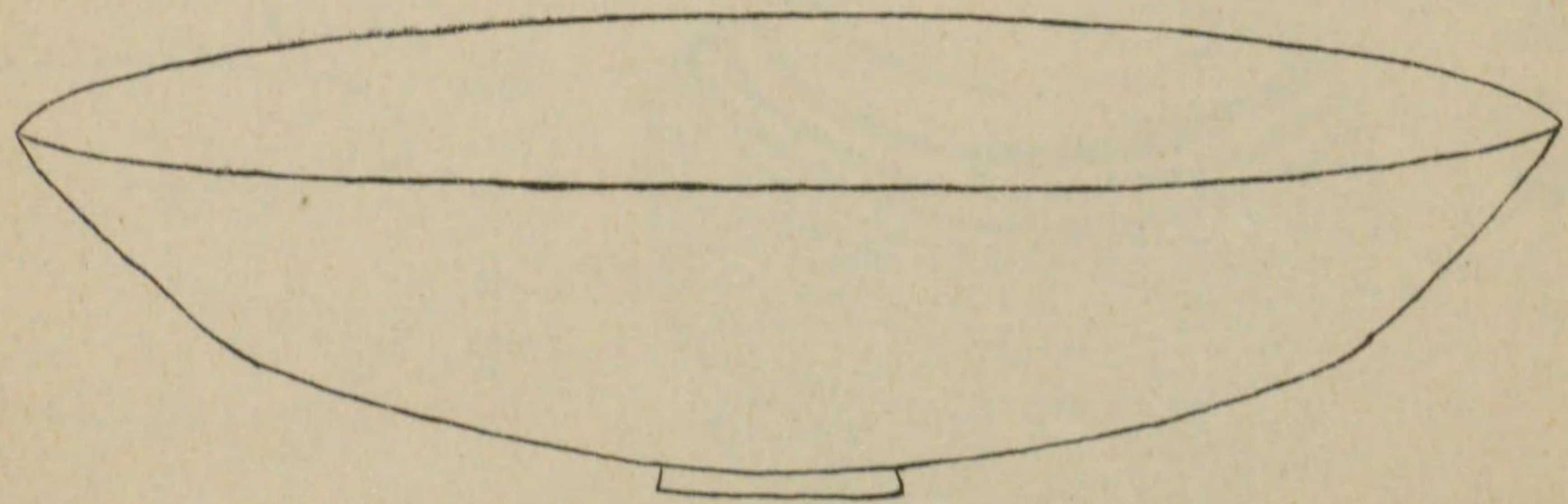
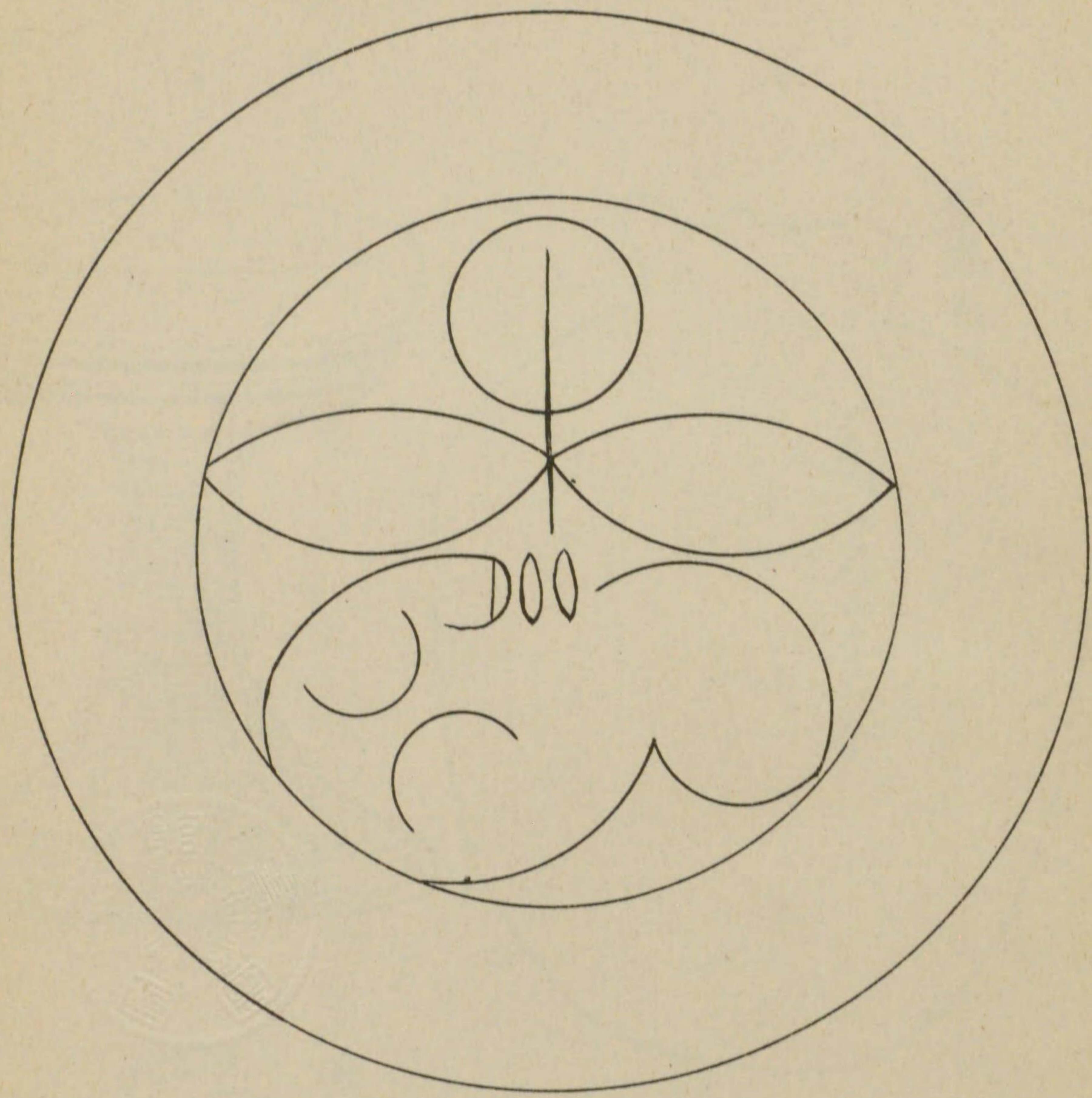
上妻郡高江村庄屋宅中堀竹林所得鏡 并四圖

上妻郡高江村庄屋宅中堀竹林所得鏡 并四圖



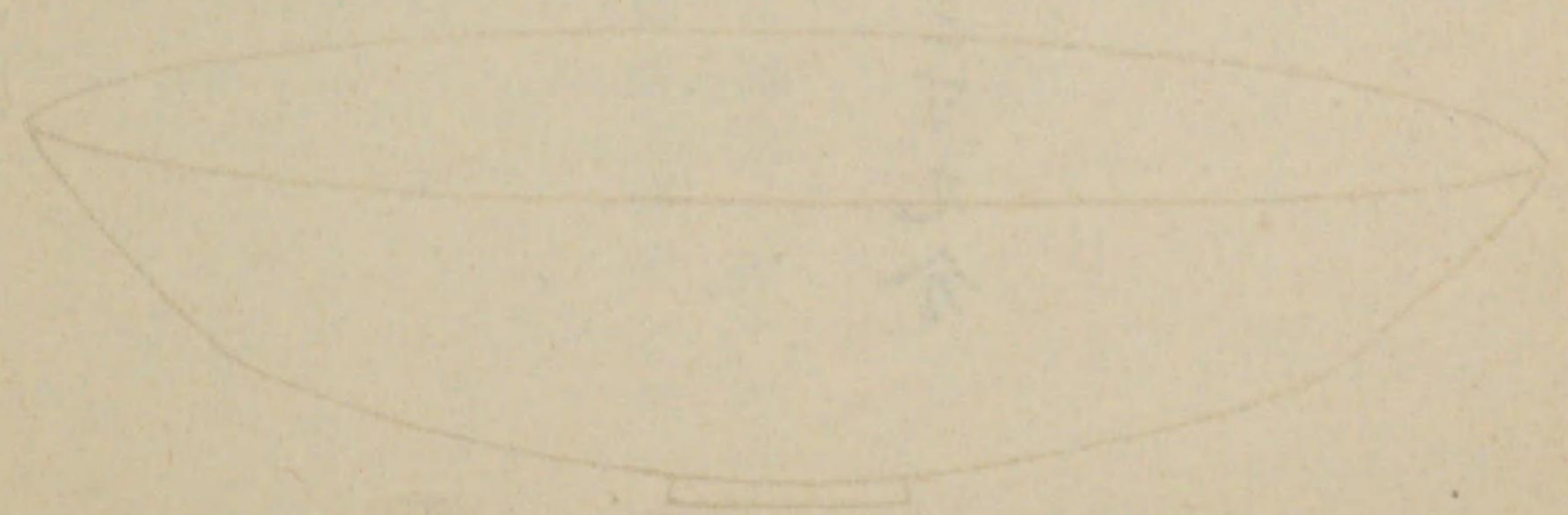
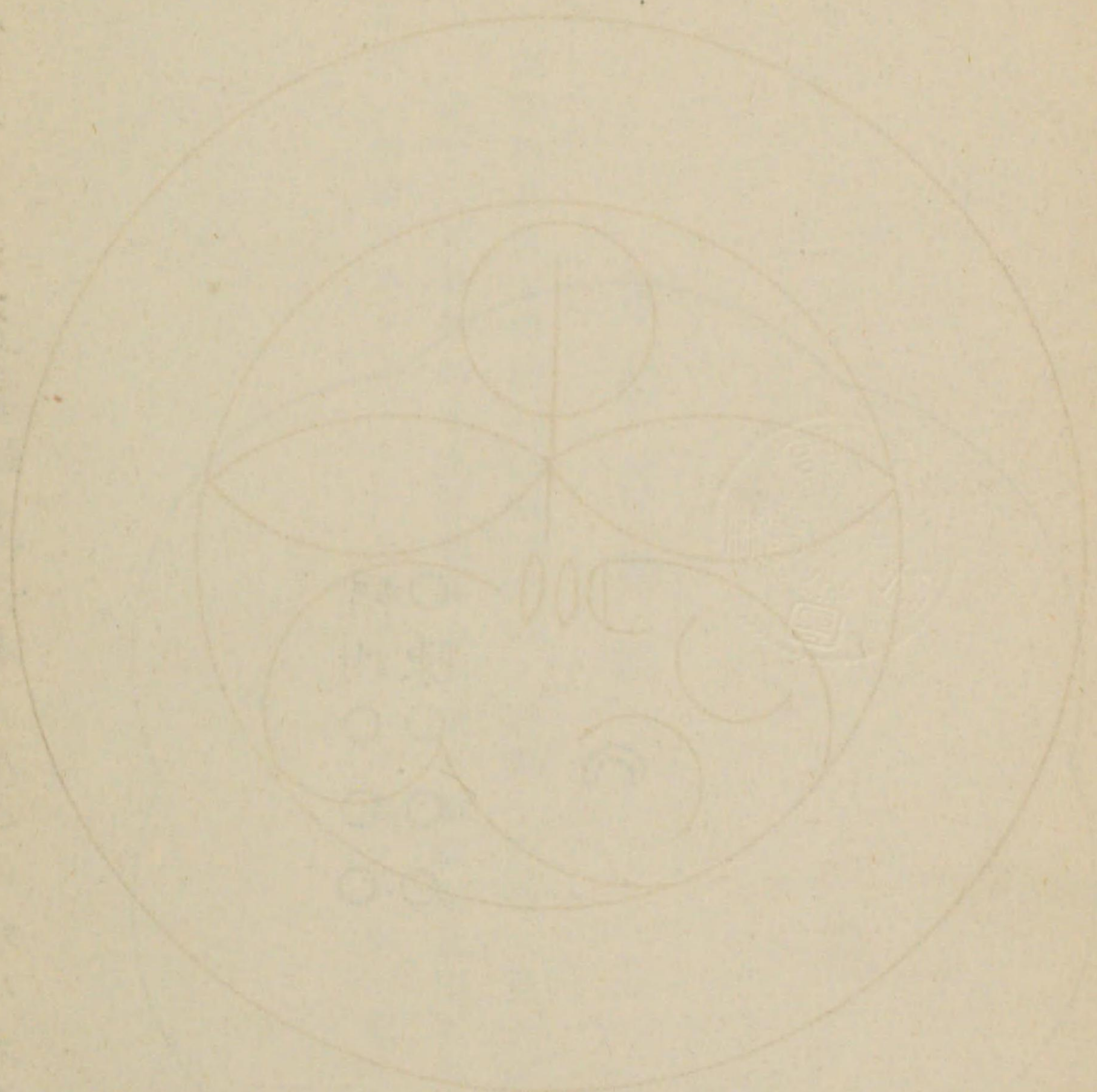
徑三寸九分





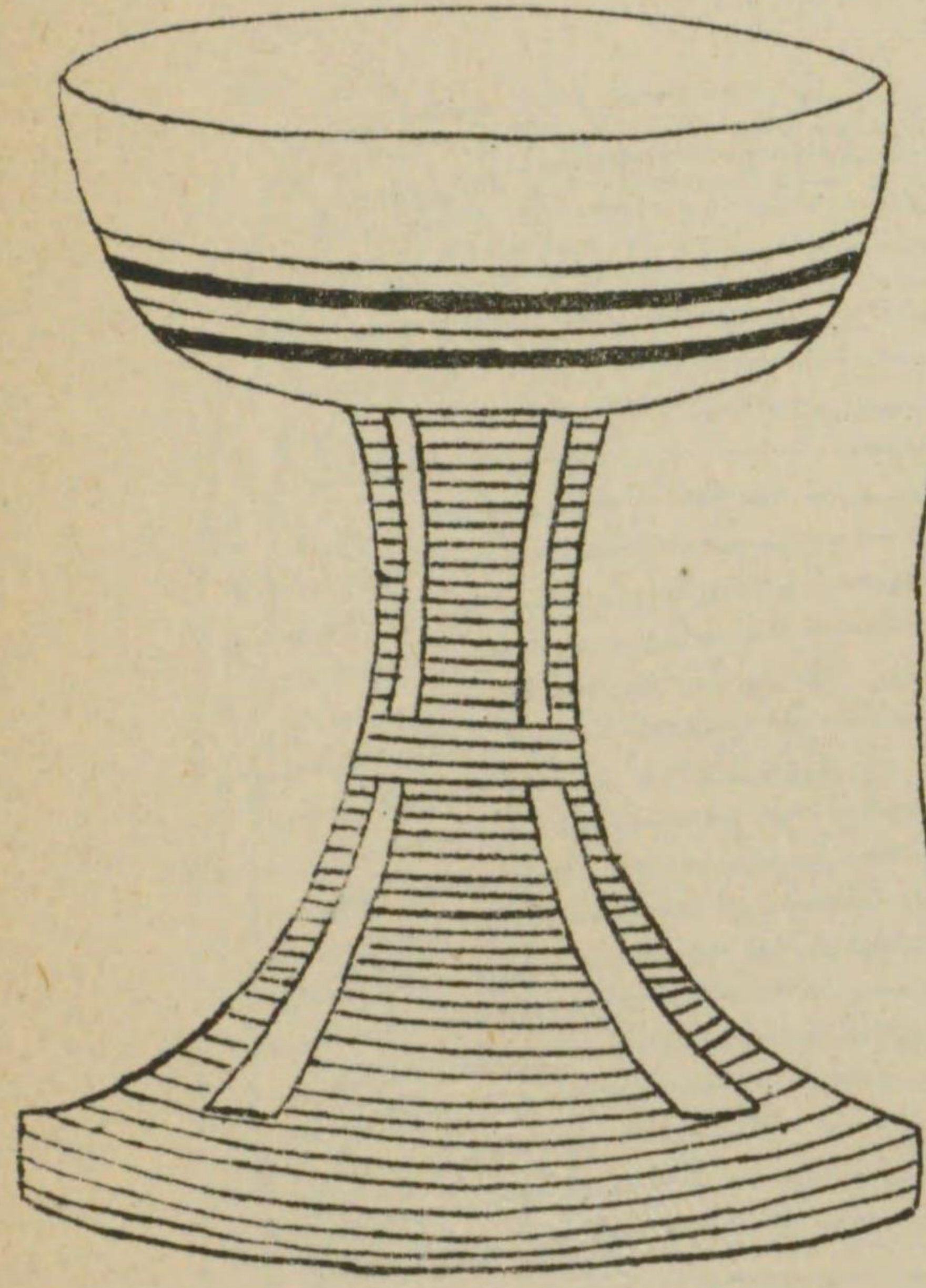
高麗燒四十枚  
八枚破壞  
二枚全  
直径四寸五分

高麗燒四十枚  
八枚破壞  
二枚全  
直径四寸五分



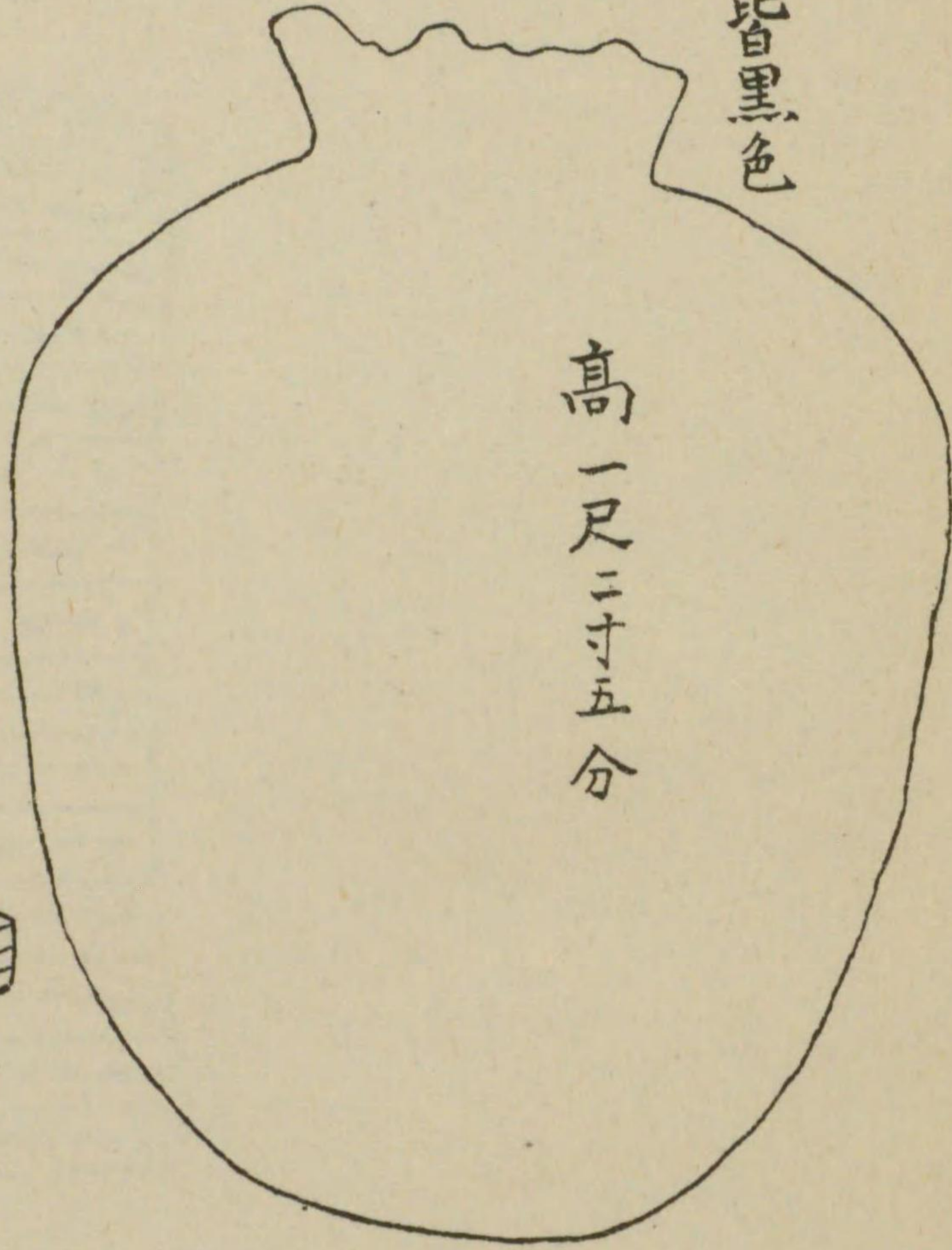


同五寸



皆黑色

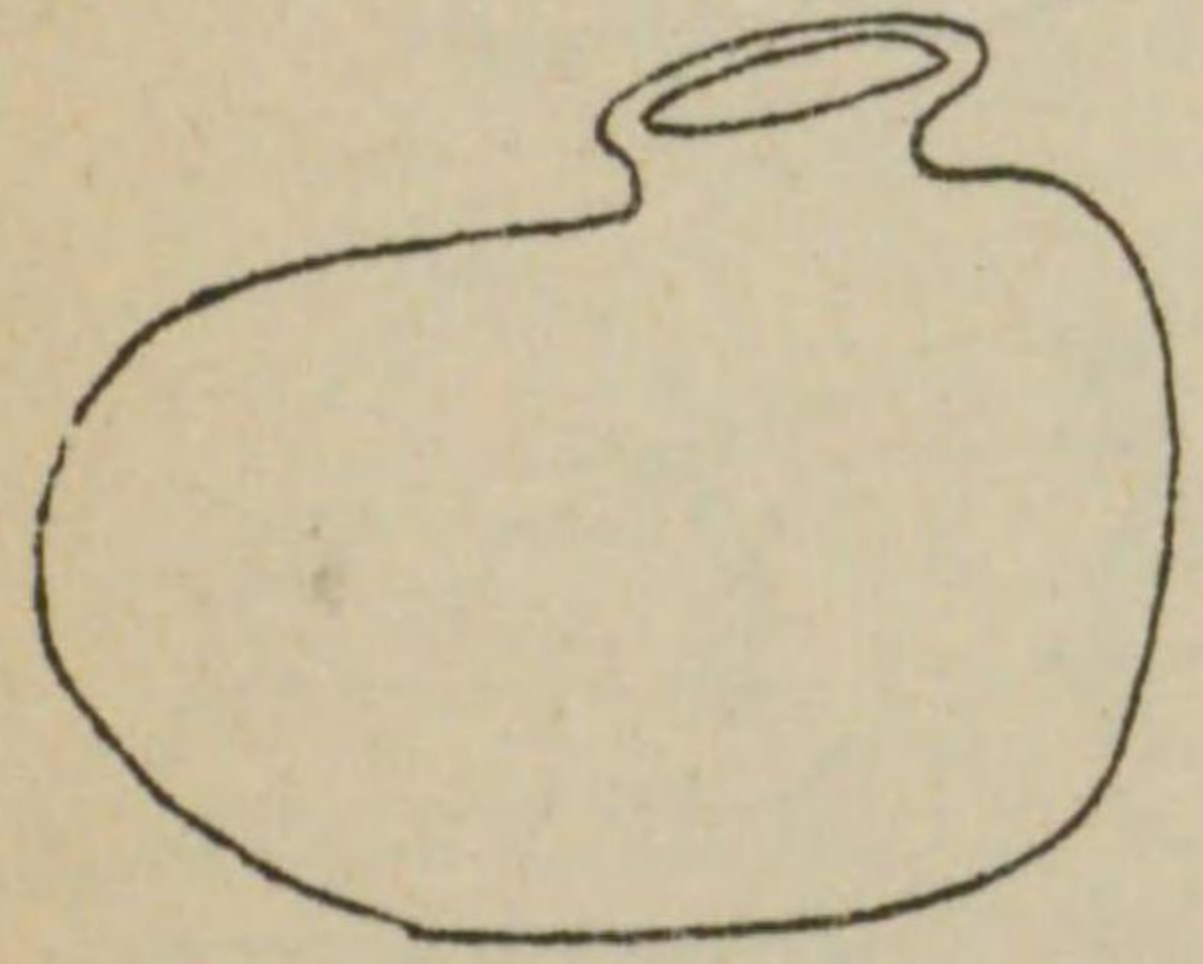
高一尺二寸五分



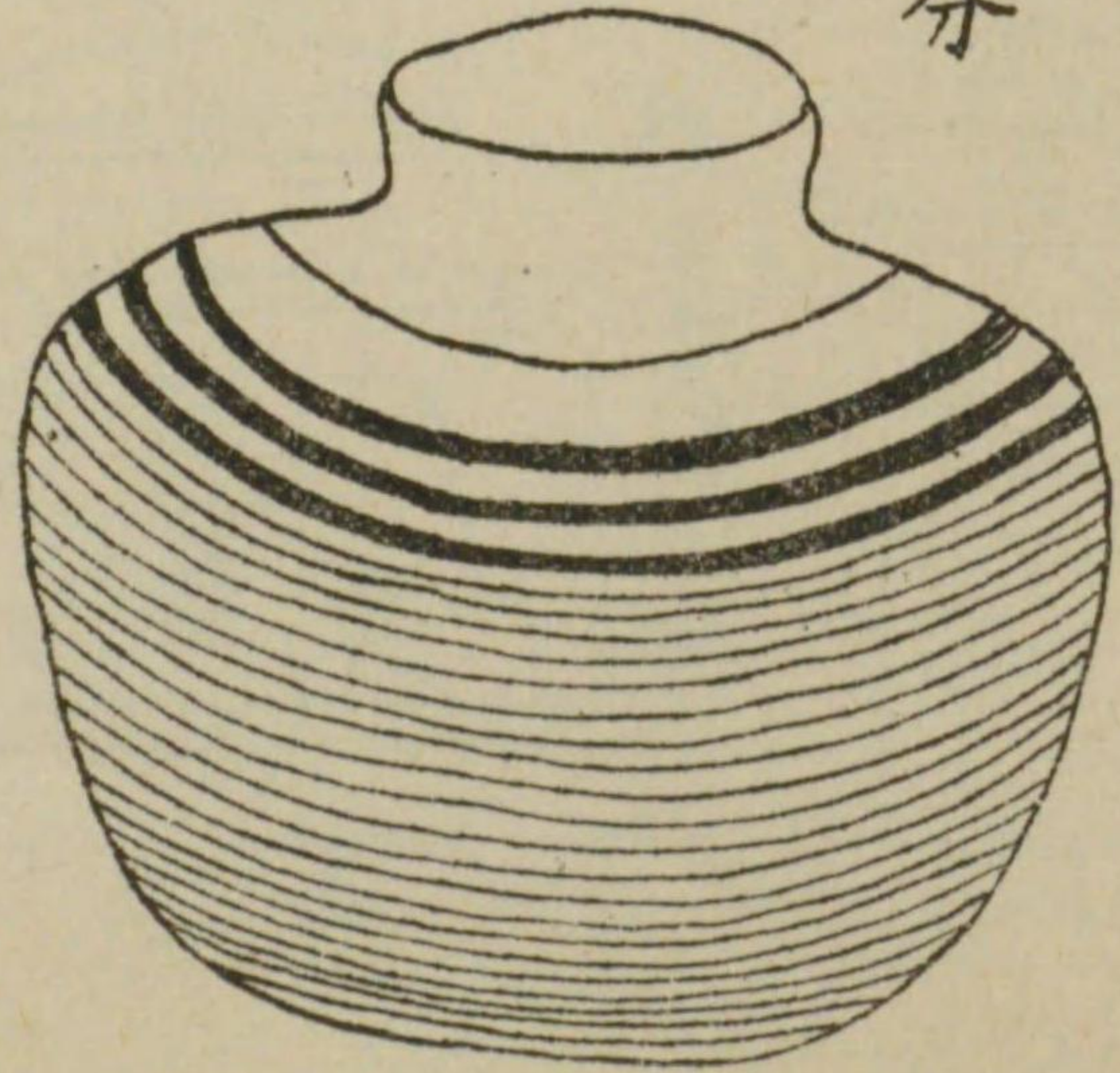
從竹野郡上森山村五反山窟中所出赤陶瓮五

大者一庄屋家藏  
餘皆藏矢野氏

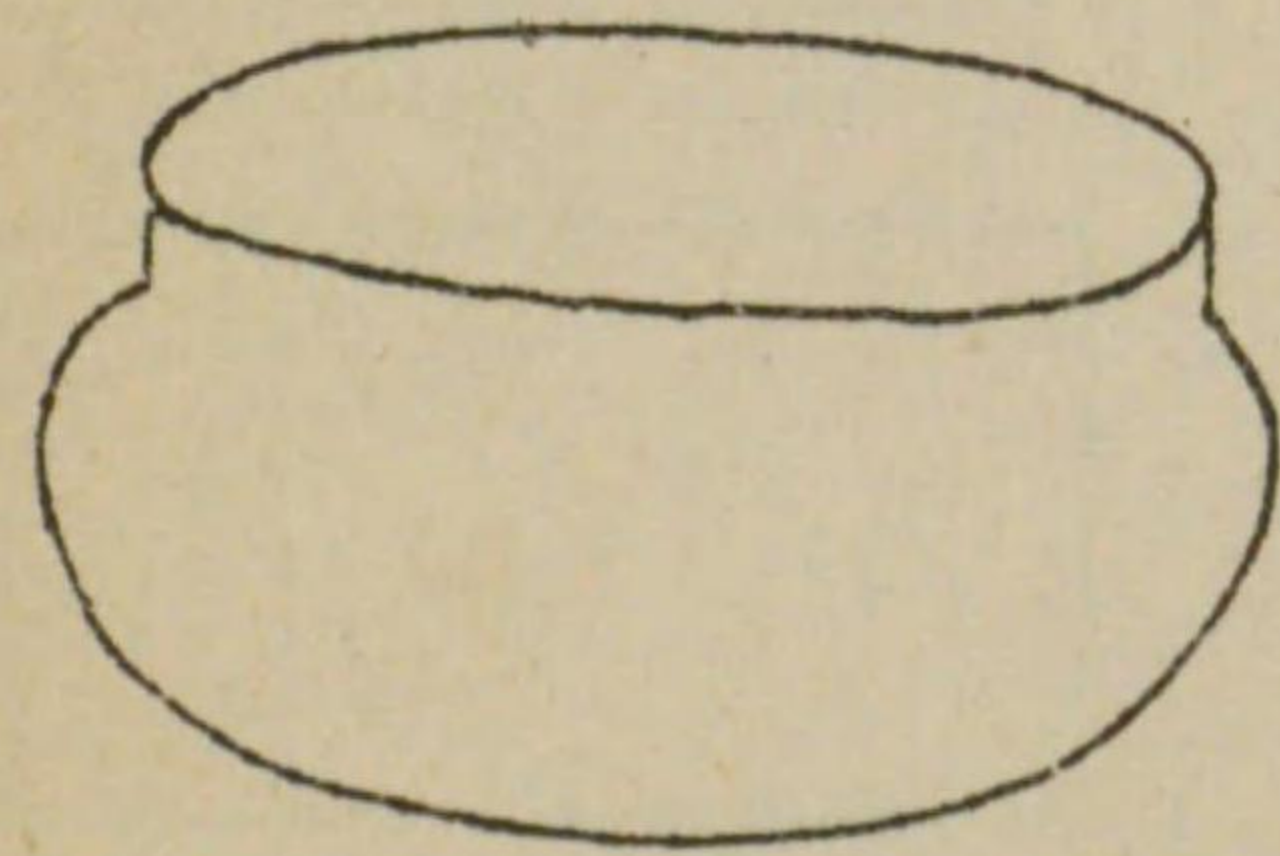
同三寸七分



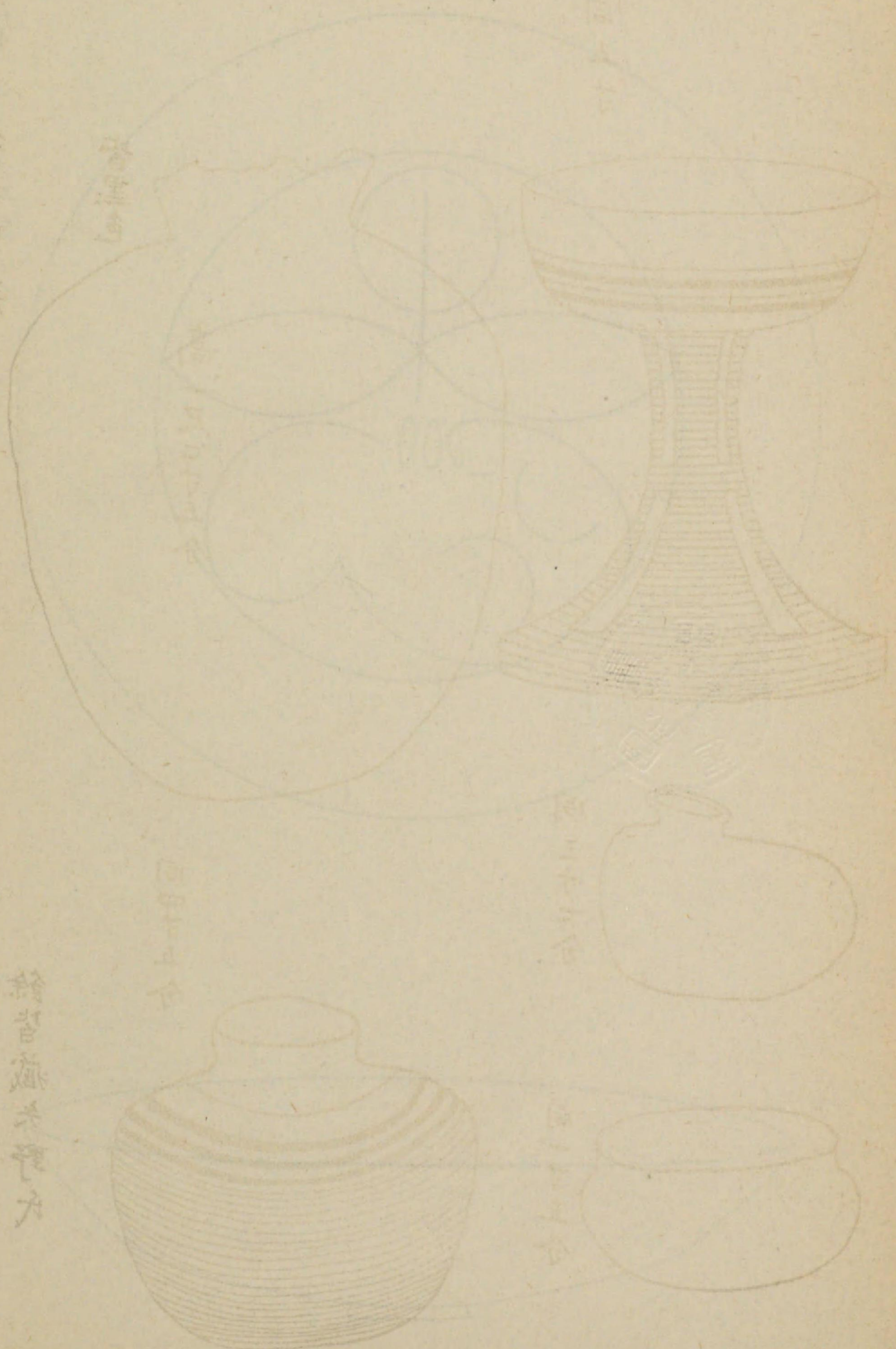
同四寸五分



同一寸五分

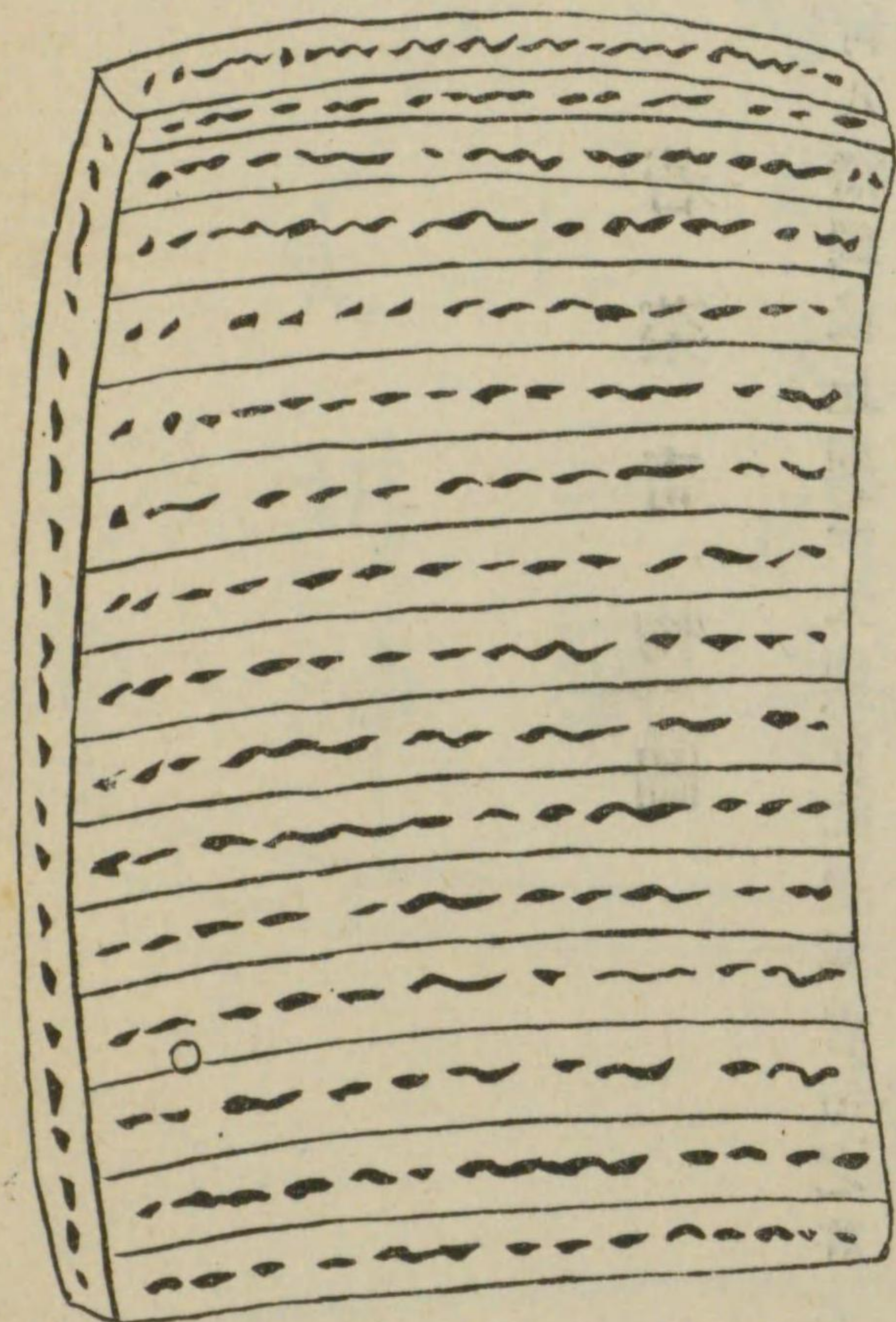


於竹野郡上森山村五反山窟中所出赤陶瓮五  
繪習藏大者六  
大者一庄屋家藏  
餘皆藏矢野氏

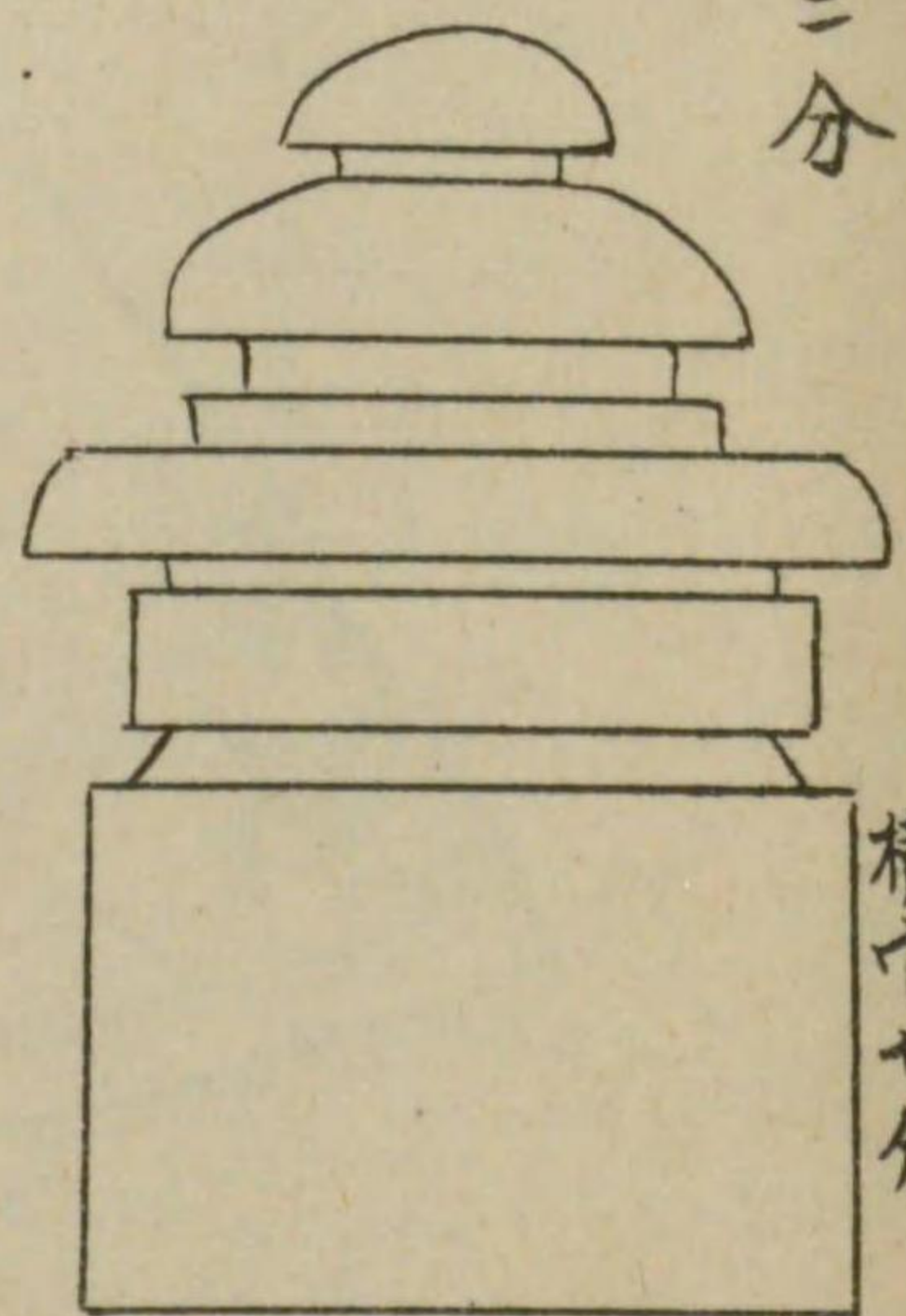




長六寸  
五分幅  
五寸五分  
厚八分



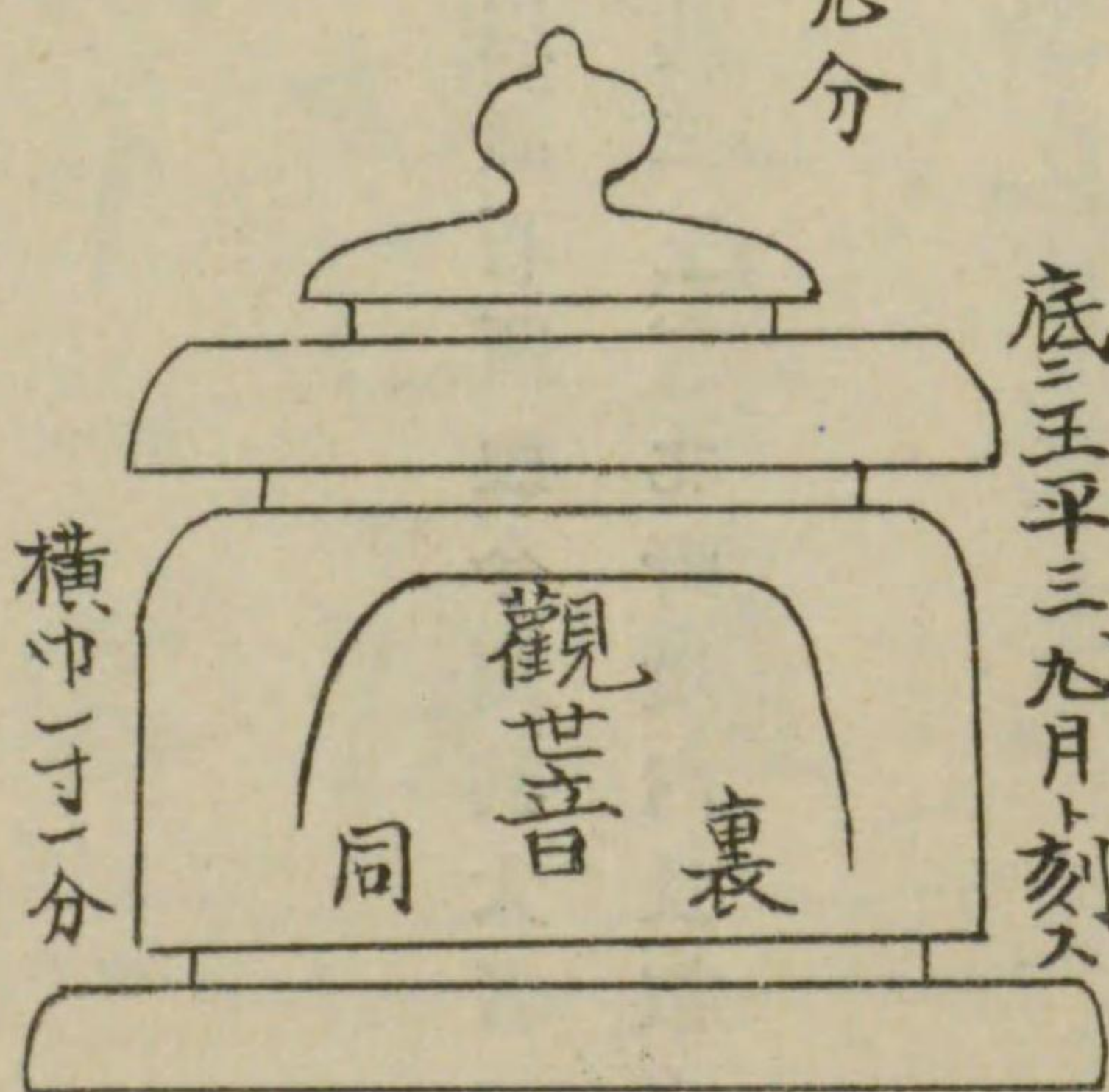
高二寸二分



横中七分

一吋二分

高二寸九分

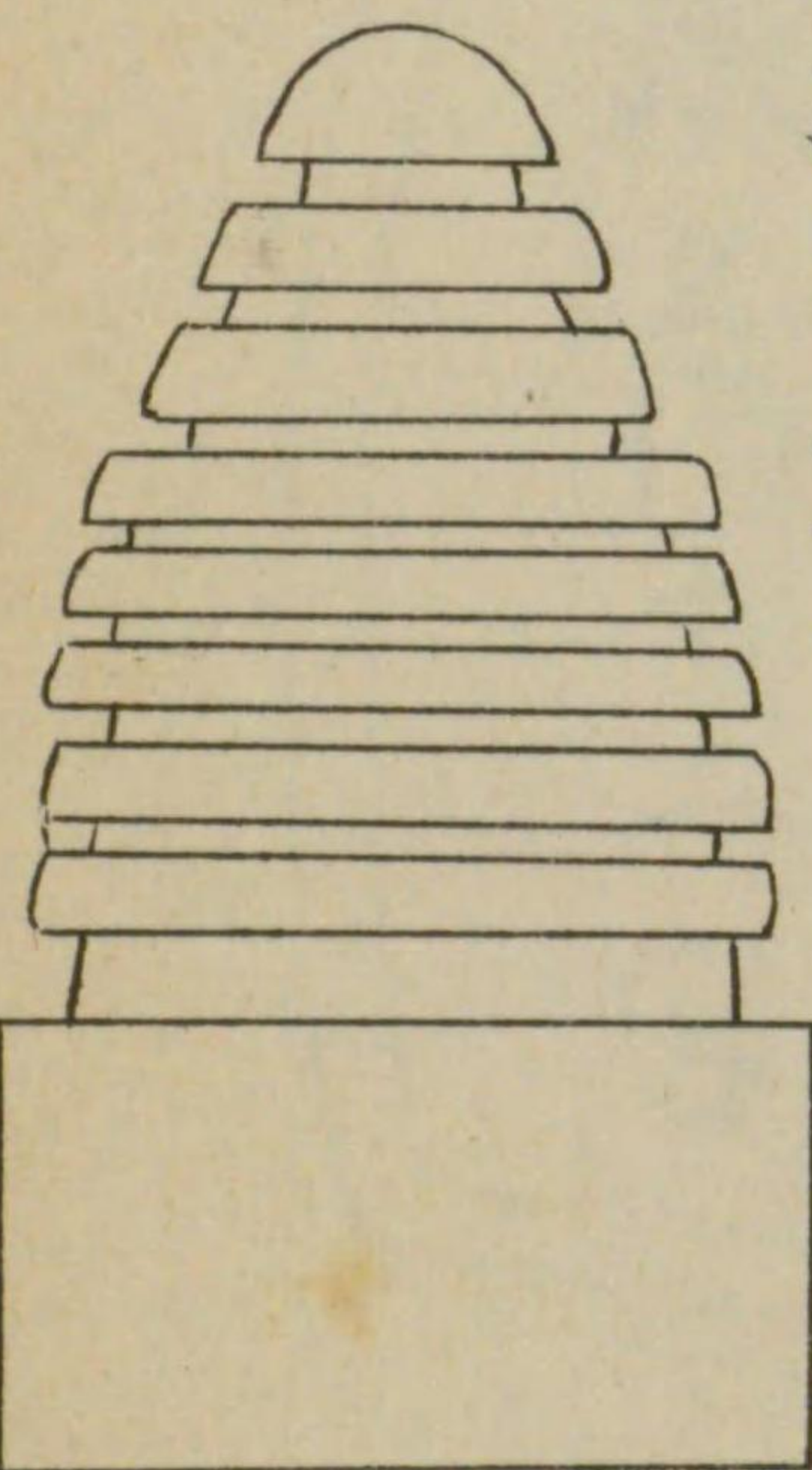


底王平三九月刻ス

横中一分

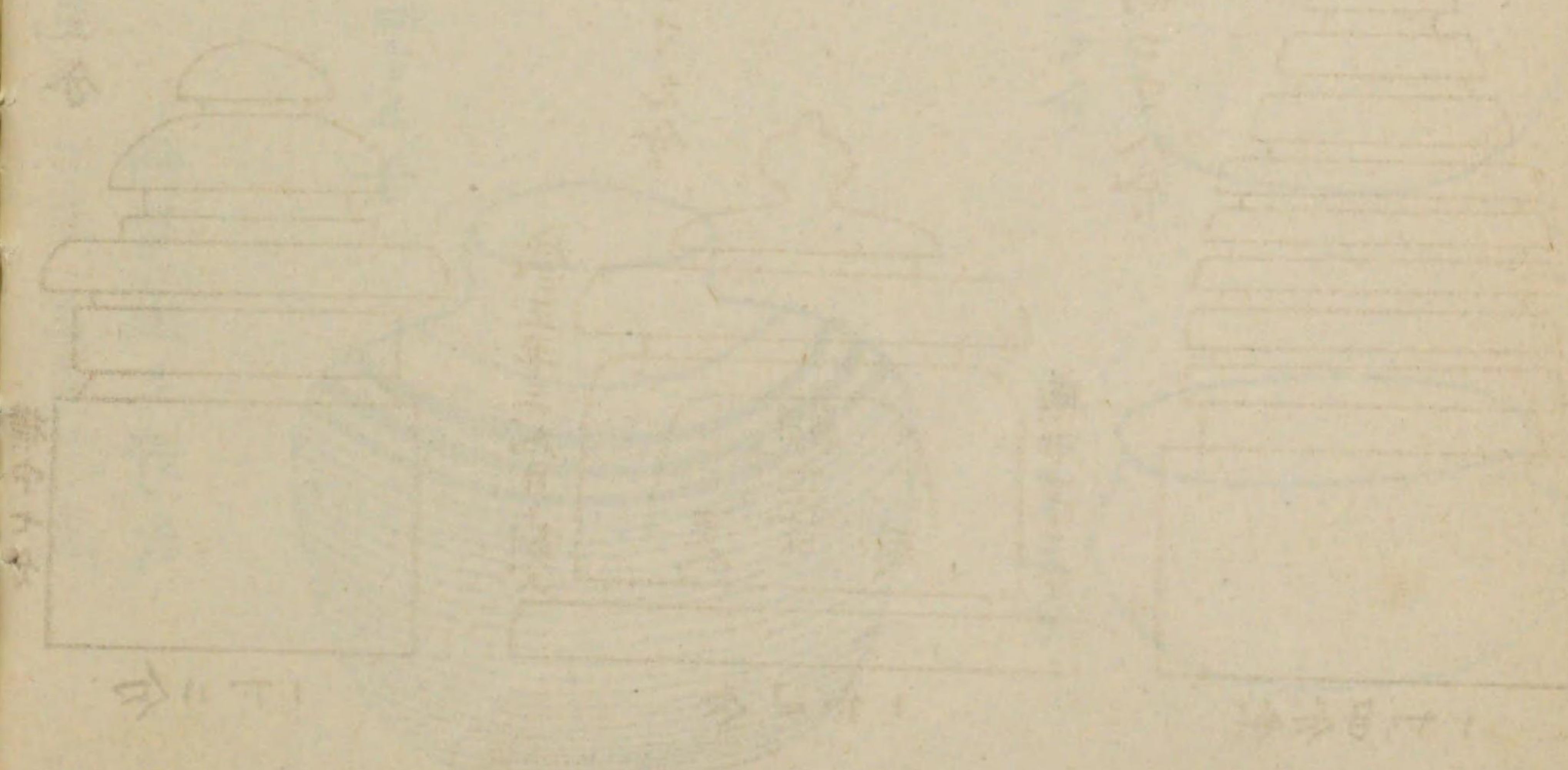
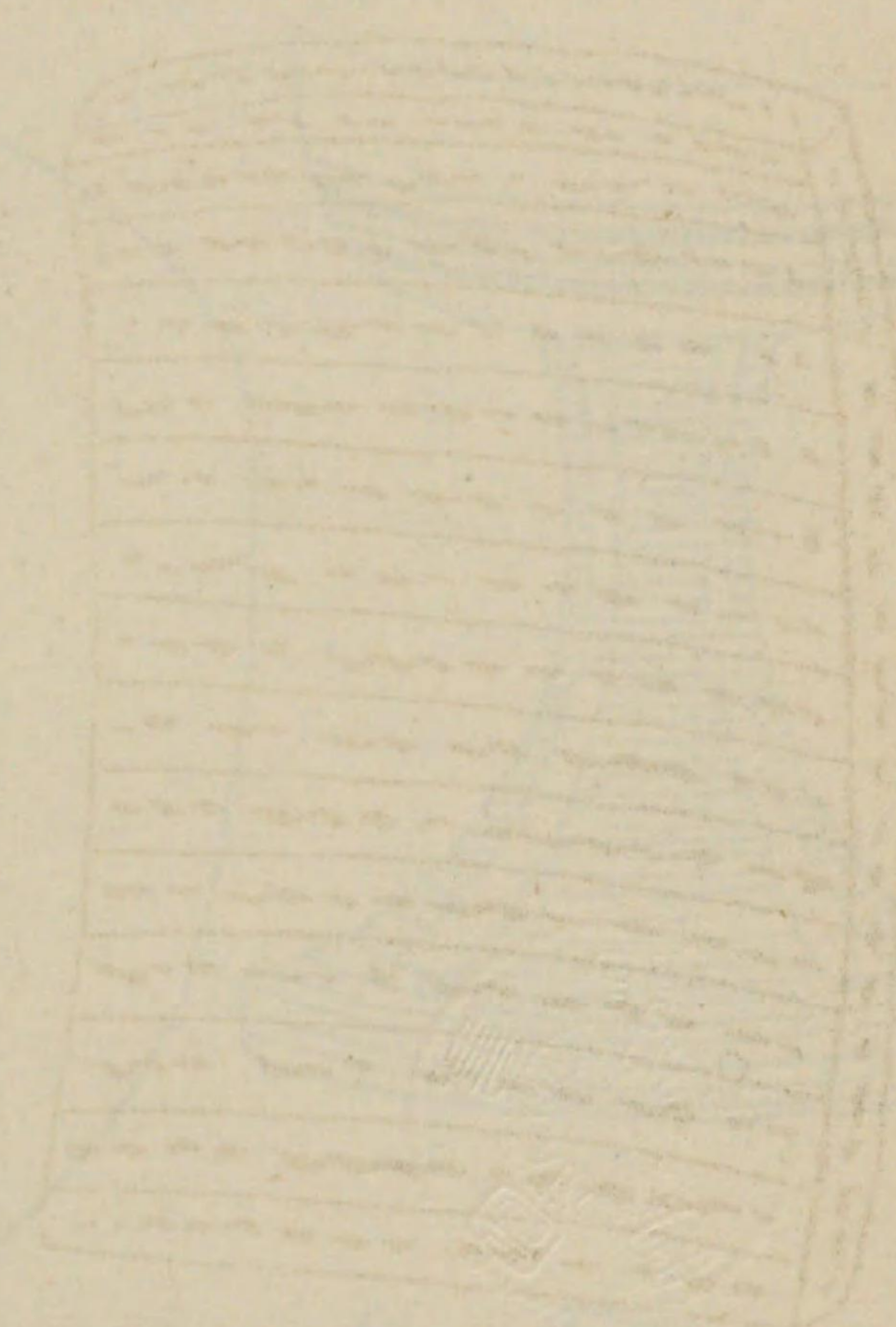
一吋五分

高二寸八分



横中八分余

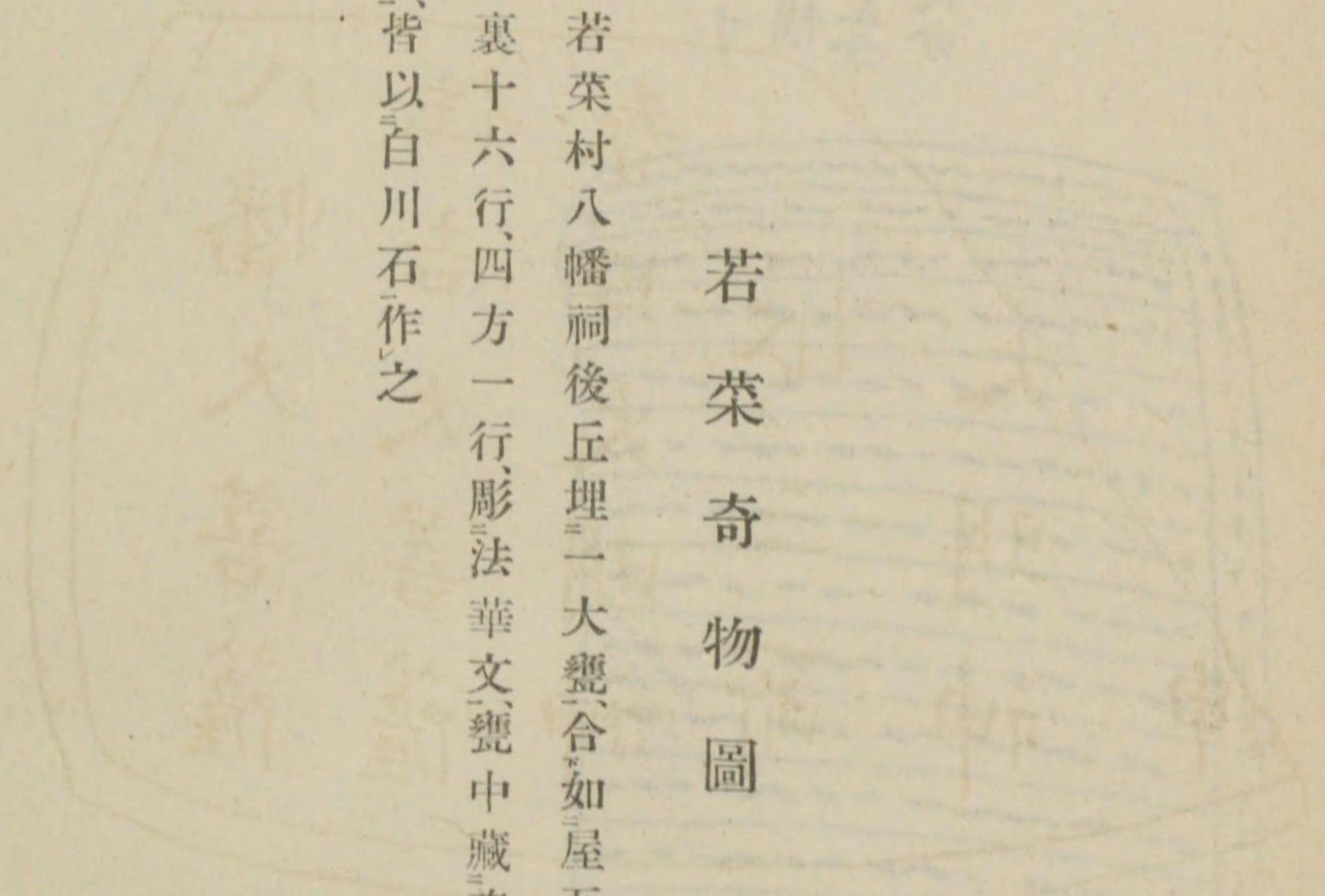
一吋四分余





若菜奇物圖

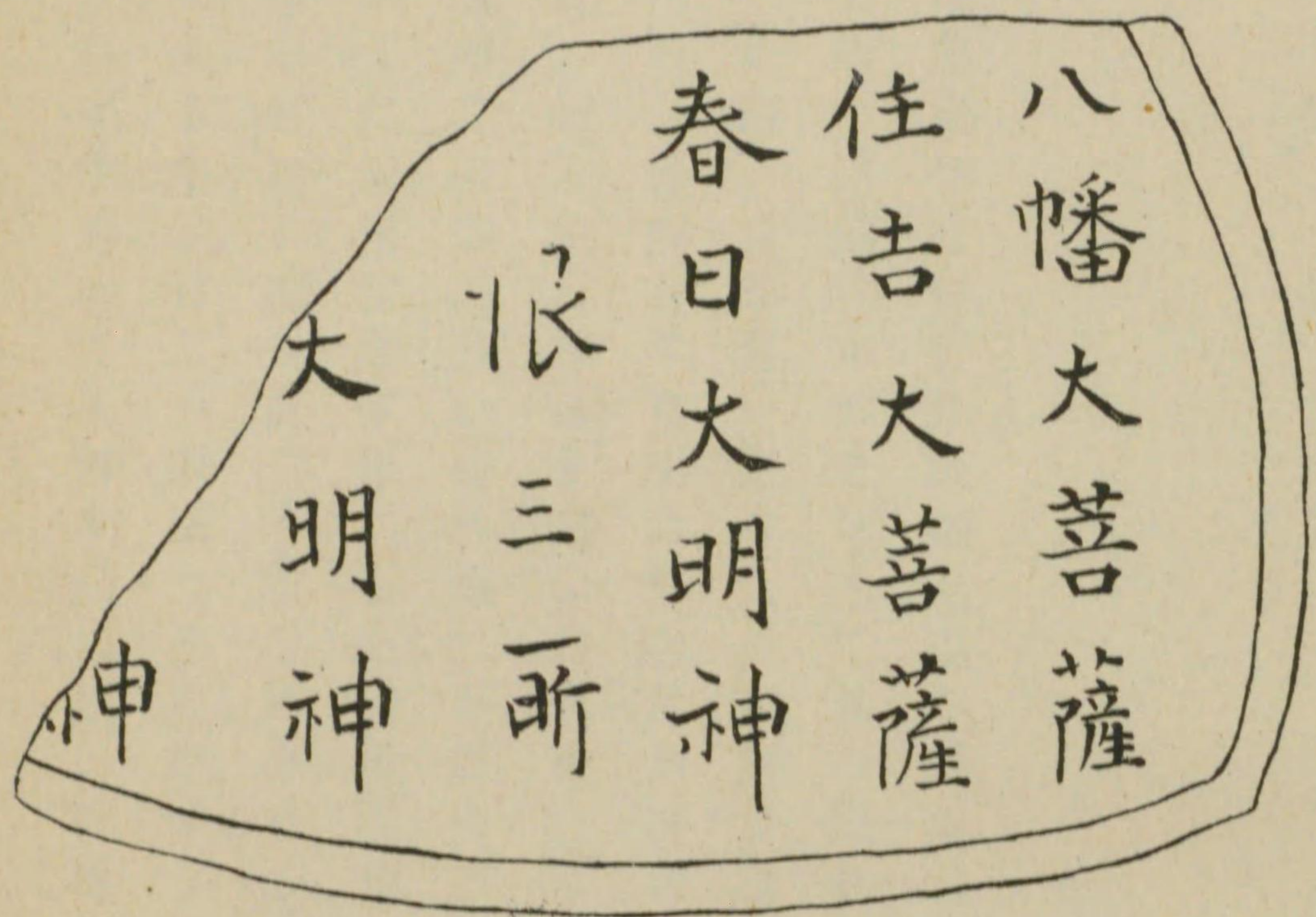
上妻郡若菜村八幡祠後丘埋一大甕合如屋瓦者造之許多有大小都以温石所製今圖其大者一表十九行裏十六行四方一行彫法華文甕中藏許多塔是亦有大小今圖其二三有北野境內及叡山等類之者皆以白川石作之



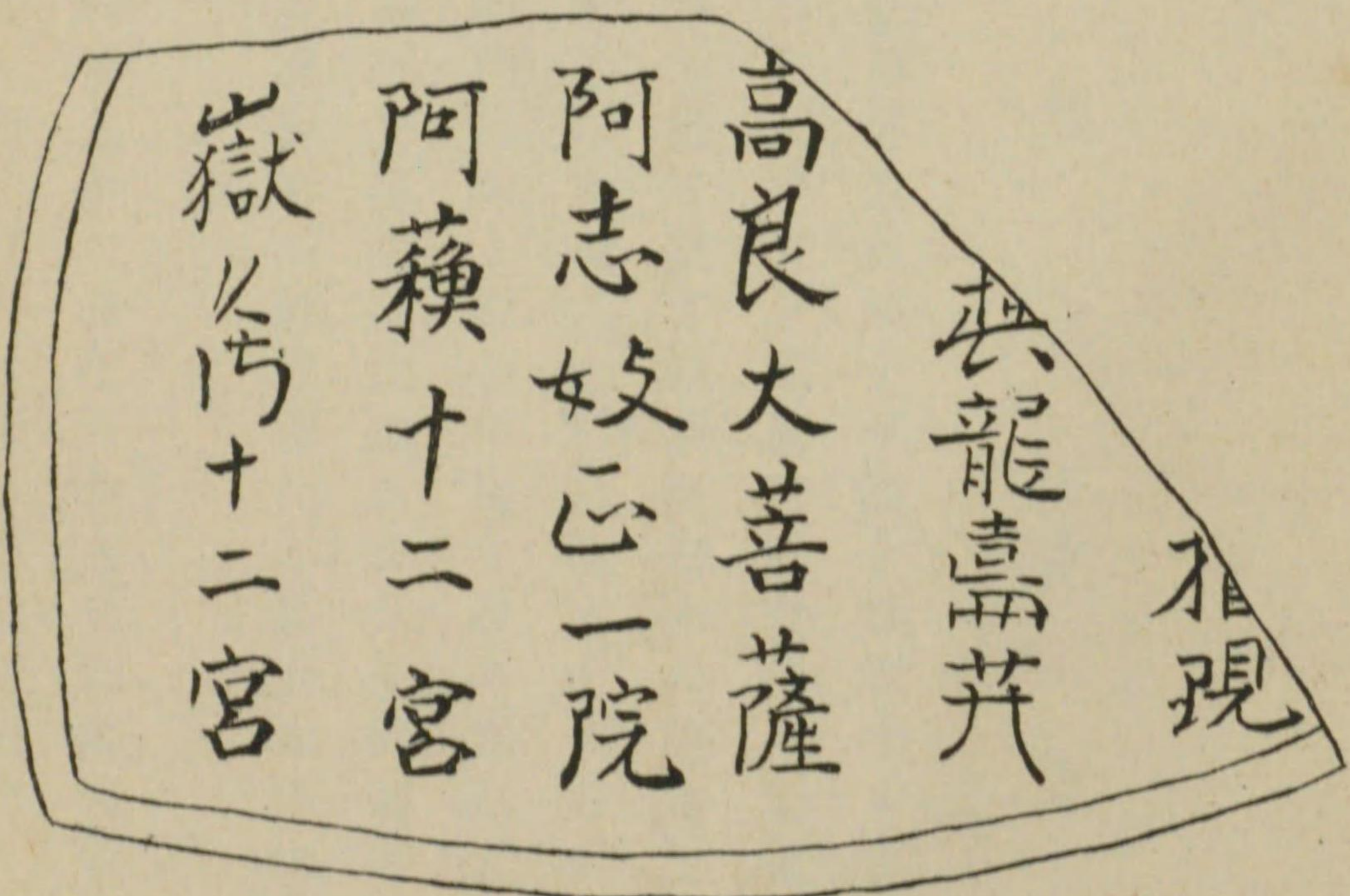
長五寸五分幅三寸

長五寸五分幅三寸

表



裏





隠れたる者 矢野一貞先生

黒岩立堂

今回筑後遺籍刊行會が筑後郷土志の權威たる筑後國史(舊名筑後將士軍談)を出版するに當り、其著者矢野一貞翁の小傳を草して、此の隠れたる南筑の一大學者を江湖に紹介せんと欲す。

家系 矢野一貞初名一照幸太夫と稱す、後幸夫サキウと改め、竹樓と號す。筑後久留米の藩士早川平右衛門の二男にして、寛政六年六月十四日三潞郡京町字小松原(現今久留米市)に生る。七代の祖を近藤左近と稱し、中村式部少輔の家老職たり、其子平右衛門に至り、姓を早川と改め、寛永五年久留米藩祖有馬豊氏公に仕へ、祿二百五十石を食む。一貞の父平右衛門初名喜久太郎、後近藤一瓢と稱す。是天明年間家督二百石御馬廻役となり、藩費講談所の肝煎役たり。兄士太郎は文久年間中小姓頭と爲り、百五十石を給せらる。

先生文政十年二月三十四歳にして出て、同藩士矢野吟之亟の義子と爲る。矢野氏祖先傳左衛門、貞享年間始めて久留米侯に仕へ、大筒師範役と爲り、祿二百石を食みて、竹間組たり。其六



代の裔孫又右衛門の弟吟之亟は即ち一貞の養父なり。

閱 歴 先生の公職上の經歷大要左の如し。

- 一文化十一年七月馬淵加兵衛に屬して東武に詣り翌年六月歸郷。
- 一文政七年二月十四日明善堂素讀方助仰付らる。
- 一同十年六月廿八日養家相續二百石御馬廻組となる。
- 一同年閏六月十一日明善堂出役仰付らる。
- 一同十二年九月十五日御殿素讀方仰付らる。
- 一天保十年十二月明善堂出役差免せらる。
- 一同十三年正月十六日大小姓御番方當時助を命せられ、同年三月七日差免せらる。
- 一嘉永六年水手御番當時助を命せられ、安政四年七月本役を爲る。
- 一萬延元年十月廿八日組頭格國學引立方を命せらる。
- 一文久元年地志編輯申付られ、廻村休泊の費用として毎月金貳兩宛支給せらる。
- 此の地志を筑後國郡志と稱し、成るに従つて之を藩廳に提出せり。
- 一同二年五月漢學通考十卷一帖献上せし廉を以て金子三百疋を賜はる。
- 一同年十一月十二日上京仰付られ、十五日發足廿七日着京、和泉攝津警衛御持場の繪圖及海面の淺深等取調べ、翌三年八月十一日歸國。
- 一元治元年三月八日金銅鐵山及諸物産取調の爲め四國、中國、九州巡視を命せられ、五月九日歸着。
- 一同年六月十二日開物方加役奥通り仰付けらる。

一慶應元年十一月十九日國學熟達につき、御先手物頭格仰付けらる。

一同二年十二月廿三日豊後日田郡代窪田治部右衛門と使者屋にて面談す。

此の前後薩州の黒田嘉右衛門、肥前の糸山美濃、長谷部眞濟等來米につき使者屋又は井筒屋にて對談せり。

一同三年三月十九日著述書一箱、筑後將士軍談、傳聞密語、歸厚遺物、瓦考草按、蠶桑慨談、縣苞献上せしにつき笹龍膽御紋附上下地並に白銀七枚下賜せらる。

一明治元年十一月十日神祇改正調役拜命。

一同三年八月十日神事局司事拜命、同年十一月一日權大屬に任せらる。

一同六年五月廿九日高良山豊姫神社、同所高樹神社、祠官兼勤權小講義拜命。

一同年八月二十日高樹神社由來略記一冊、三條十一件講録一冊を中教院へ差出す。

一同八年十月十八日御井郡郷社北野天滿神社祠官を爲る。

死 歿 斯くて先生は明治十二年八月二十日吐瀉病に罹りて永眠せり、享年八十六。市外御井

郡野中村隈山に葬る。養嗣子傳左衛門一義實は同藩士吉田敬藏の二男家を襲ぐ。

師 友 先生國學は久留米藩士にして嘗て本居宣長の門に遊びし尾關守義の子眞勝に就い

て學び、歴史歌文は友人船曳磐主(鐵門)柘植信厚等と共に切磋研究せりといふ。又筑前の伊藤常足、肥前の糸山貞幹、柳河の西原晁樹等とも友とし善く、時に談論を交へ和歌の贈答を爲せり。



門人 先生の門人数十人、就中明治六年の比筑後地理誌編輯掛たりし三谷有信、宮川眞澄及神職武田巖雄、守山夏樹、氷室道別、女流歌人井上田鶴代等最も名あり。

學藝 先生は學問に常師なく、和漢の書籍は明善堂及國老等の藏書を借り、大抵獨習にて之を讀破し、以て所謂博覽強記の人と爲りたるなり。されば参考書に乏しき南筑の一小邑にありてよく幾多の大著述を成す事を得たりしなり。

先生攻學の餘暇、漢詩、國文、和歌を嗜み、時に俳句をも作り、又繪畫をも描きたり、久留米の佐藤某氏の秘藏せる高良山の圖の如きは彩色畫にて觀るに足るべき物なり。

翁が漢學に造詣深かりしことは、其著漢學通考及左に掲げたる筑後諸將軍記(後筑後將士軍談と改稱)稿本の跋文を見ても、其一斑を窺ふことを得べし。

右弘化四龍丁未季秋初三、擲秃筆(卷之七)。

弘化丁未曆麥秋六日、投翰於竹樓東牖下(卷之八)。

弘化丁未暮秋望、措毛錐(卷之十)。

皇弘化四歲次丁未秋九月晦、業畢(卷之十二)。

弘化丁未十二月八日、終功(系譜小傳第十二)。

弘化戊申初春十九日、擲筆(卷之三十四)。

弘化戊申杪春七日、卒業(卷之五十三)。

弘化戊申杪春十九日、辭管城子(卷之四十附錄)。

余は大正六年の冬、漢文學の泰斗服部宇之吉博士が講習會の講師として久留米に來られし際、翁の著漢學通考を同氏に示し、其の記述の多方面にして組織的なるを見て、嘆賞賞措かず、是實に天下の珍籍なりとて、歸京後借りて之を謄寫せしめ、以て大學の圖書室に備附けられたり。

翁が考古歴史の研鑽に熱心なる筑後國內の林中叢間足跡到らざる處なく、古塚遺蹟を探り、或は社寺舊家を訪れ、或は故老の談を聽き、獲る所の遺物舊記、文書等悉く之を筆録描寫し、此等を材料として編輯せる物、即ち筑後將士軍談是なり。

明治二十年の秋、内閣修史局なる久米邦武博士史料採訪の爲め久留米に來り、篠山神社所藏の筑後將士軍談を見て、其の記載の精細にして引證の該博なるに驚き、此の書宜く筑後國史と稱すべしと、即ち之が謄寫を武田祠官に囑せり、よりにて門人兼吉愼吾、宮川眞澄、菊池正賢、西村弘毅の四人分擔筆寫して之を東京帝國大學に寄贈せしかば、金若干を贈りて其の勞に酬いられたり。此に於て翌年五月廿七日、其の得たる筆耕料を以て門弟子相謀りて先生の招魂祭を營み、詩歌、拔書、懷古を題としてを奉納して、翁の大著が大學の修史上有力なる資料となりし事を奉告せり、其の情誼實に掬すべきにあらずや。

實學 翁は唯單に漢學者として、將考古學者として、或は歌人として、徒に史を談じ文を論じ、月花を弄びし腐儒に非ずして、夙に國家の富強を圖るは農工を勸めて殖産の道を興すに在り、と爲し、藩の當路者にも獻言し自ら進んで其調査研究を爲せる人なり。翁が慶應二年に記したる蠶桑慨談と題せる意見書の末節に曰く

博覽多識を學こして無用の辯に力を盡し、或は高遠に馳せて當務を廢し、好んで空言を吐いて實行に意なく、或は裁詩作文に流れて俗塵を脱し、風月を弄ぶを雅趣とし、各々其好む所に僻して有用の學を嗜む



者なし、庶人の學は天の時地の理を知り、土性の品類を辨別し、培養の調和に熟達せば、足れりといふべく、百の空言を吐いて、醉生夢死せんよりは、一の實行を擧ぐるもの益有りて、且樂しきにし、かんや、早く、郷校を起し、右等の人をして、悉く農政學に趣かしめ、農長等之を學びて、百姓を導かば、富強の基をなさん、事何の疑かあらん。

と其識見現代人士の當に三省すべき所なりとす。

又翁が元治年間下役下川喜市郎及玉藍製法研究の爲、紺屋一人を伴ひ、四國、中國、及九州に亘りて、金、銅、鐵、石炭の採掘法並に藍、人參、繭等の栽培製造法の實地を調査せる如き、皆其主義を實現せる物なり。

逸話 翁の明善堂にて國書皇典を授くるや、必ず先づ其講すべき個所を豫告し、おくを例とせり。

一日藩侯の面前にて、令義解を説明せるに、熱心の餘、獨り覺え、豫定の範圍を脱して、次の條章までも講じ去らんとせし爲、侍者より注意を受けられたる事ありきと。(門人三谷有信翁談)

又先生は明善堂出勤中、必ず古今和歌六帖を携へられ、教授の餘暇常に之を手にし、せられたれば、學生等は「今日も矢野先生が例の和歌六帖を持つて來て居られる」と言あへりきとぞ。(明善堂出身山本常寬翁談)

翁嘗て同志者と共に筑後御原郡なる菊池對少貳の古戰場たる大原を踏查せる際、武光が血

刀を洗ひたりと傳へられたる太刀洗川に臨み、此河中若し激戰當時の劍戟、箭矢の埋沒せる物あらば、河水に鐵氣を含むべし、今之を驗せんとして、人をして其水を汲みて、湯を沸し、茶を煎せしめられし。(門人三谷有信翁談)が如き尋常一様の儒者たらざりしを知るべし。

編著 先生の著述編纂せられたる稿本頗多し、今其主なる物を擧ぐれば左の如し。

柏葉抄錄 (九冊)

久留米人杉山正仲の筆録米管事蹟雜記、同小川志純の筆記、或は筑前人伊藤常足の鈔錄並に筑前早鑑鎮西要略其他の諸書及び古社寺舊家等より得たる筑後に關係ある古文書、舊記、系圖、緣起等を拔萃抄錄せるものなり、柏葉は先生の文庫の名なり。

柏葉雜錄 (壹冊)

初に文政八年村上量敏と共に筑後生葉竹野兩郡内を歴遊せし時の見聞漫錄たる「生竹巡覽」を載せ、其末に大祝家記、小河記、梅林寺記、梅津家由來を附記せるものなり。

柏葉抄錄附錄 (壹冊)

筑後に關係なき他國の風土其他事物起原等の雜事を抄錄せるものなり。

筑後將士軍談 (五拾六冊)

第壹卷より貳拾叁卷迄は軍記にして、第貳拾九卷より四拾四卷までは系譜小傳、第拾五卷及四拾六卷は城館第宅、第拾七卷より五拾貳卷までは墳墓碑塔、及贅圖、第五拾壹卷は列傳、第五拾四卷より六拾卷



までは年表なり、其内容は曩に筑後遺籍刊行會より發行せる筑後國史(即ち筑後將士軍談)上卷の内容目次に詳なり。

漢學通考 五冊(拾卷)壹帖

初に安政二年四月の船曳磐主の序文、及嘉永七年三月の自序あり、又末尾に安政二年五月の戸田藤蔭の跋文あり、然して其内容は次の如し。

- 第一卷 述作大意 學術盛衰 國學有無 假字之說
- 第二卷 訓譯之辨 對註得失 言語之論
- 第三卷 五十字文 反切略議 四聲三聲 誦讀聲調 讀法點例
- 第四卷 字音摘要 書籍傳來 置史編書
- 第五卷 大學起原 官人雜色 四道儒士 大學寮圖附出(別帖)
- 第六卷 課試及第 詩賦原始
- 第七卷 宴會 給料 賞賜
- 第八卷 釋奠(一) 同(二) 講論 講書

- 第九卷 御書始 尙齒會 勸學會 諸氏學 國學 足利學校
- 第十卷 經史 詩文集 書籍製印 刻 附錄(近代學校)

筑後歷世古文書

(參冊)

第一卷は天慶年間より明應年間まで、第二卷は文龜年間より享保年間に至るまでの筑後關係の古文書を年代順に排列し、第三卷は御井郡大祝家三瀨郡近藤家隈家、河原家風浪宮、及生葉郡河北家其他の所藏文書中年號不明の物を載たせり。

筑後國郡志

(貳冊)

文久年間藩命を奉じて編纂せる物にて、最も精細なる地志なるが今不幸にして其總論國府の部と御井郡高良山の部と二冊を残せるのみにて他の稿本は散逸せり。

五條文書

(壹冊)

吉野朝廷時代征西將軍懷良親王に隨從して九州に下りたる、五條氏の後裔の家筑後上妻郡矢部村に保存せられたる古文書を、原書體のままに謄寫集録せるものなり。

田制貫稱石稱集說

(壹冊)

中世秩祿の稱に貫を以てするもの、石を以てするものあり、此等の關係を研究せるものにして卷尾に負喧談の拔萃を添へたるものなり。



畝丈略記 (壹 冊)

古田土の地積を表すに幾段幾丈幾畝なごいふこゝあり、此等の面積を古文書に據りて推算せるものなり。

理髮及元服考 (壹 冊)

明治元年惣髮亂髮勝手たるべしとの令を布かれし時、理髮略考(同年五月)及元服僻按(同年九月)を綴りて結髮の變遷を論じ、亂髮一束切を禁制せられんこゝを藩廳に獻言せるものなり。

異鳥奇骨考

三瀨郡高三瀨村の庄屋に藏せる比翼鳥ヒヨトリ、同村内より發掘せる大人上頤骨に就いての考説を記せるものなり。

陵墓圖考附録 (壹 冊)

古墳内の朱象又は塚外の裝飾的彫刻及石人に關する簡單なる考説。

姫社考 (壹 冊)

筑後御原郡(現今三井郡)なる姫社ヒメノヤの社に就いての考證。

諸社拾實鈔 (壹 冊)

米藩内に於ける六拾餘の神社を祈願所、官より營繕社、祭奠を擧げらるゝ社等に別ちて從來諸書に見えざる新説を記せるものなり。

書中三瀨郡夜明村高倉印鑰社内の道君首名神及上妻郡北川内村地下名伊勢社境内の大神部博麻靈神を祭るべきこゝを論ぜる如きは卓見トクケンといふべし。

蠶桑慨談 (壹 冊)

慶應二年二月に記せる物にして初に調庸の事及勸農の詔令なきを掲げて大に蠶桑を起し草綿を廣むるの要を論じ最後に贅言ゼンゴンと題して桑の種類シノノカ其苗の配布栽培法を説けるものなり。

三道見聞雜記 (壹 冊)

元治元年の夏藩命を奉じて南海山陽西海に於ける金銅鐵等の鑛山の採掘及玉藍、人參、山藥等の製造栽培事業視察の爲出張せられたる時の調査録なり。

波の浮草 (壹 冊)

萬延元年三月友人七草園主人柘植信厚を伴ひ御井郡蛭生なる井上氏を訪ひ田主丸吉井を経て生葉郡若宮八幡宮に詣りて日の岡月の岡より掘出したる古器物を觀て上寺より船に乗り御井郡大木村に上陸歸宅せる時の和文紀行にて和歌も數多交れり。

詩歌草稱 (六 冊)

一二三卷散逸し嘉永六年より安政五年に至るまでの分を收めたる四五の二卷現存せり是は詩歌の外和文消息文等を録したり近時又別に一冊を發見せるが其卷末には二三十首の俳句さへ載せられたり。

尙他に傳聞密語、歸厚遺物、瓦考草按、縣苞、高樹神社由來略記、三條十一件講録以上各壹卷等の著

あれども今其稿本の所在不明なるは大に遺憾とする所なり。(昭和元年十二月廿六日稿)



## 跋

明治二十五六年の交余同志の人々と共に雜誌筑後を發行するに當り紙上號を逐うて矢野翁の遺著筑後將士軍談の一部を轉載し以て其の大著述の一斑を世に紹介したり私かに謂へらく由來學者文人に乏しき吾が南筑に在りて翁の如きは鷄群中の一鶴なるべく其遺著は宜しく蠹魚の好餌とならざるに先ち速に之を剞劂に附し以て不朽に傳へざるべからずと爾來在苒三十餘年其間郷土史研究家或は教育者神職等の有志者屢々之れか出版を企てしも行草書体の古文書及遺蹟古器物等の繪畫を載せたるもの多く其印刻頗る困難なるを以て遂に之を果す者無りき

然るに余曩きに朝鮮より歸郷して印刷事業に従事するや遂に意を決して一昨年末より數閱月自ら原本六十餘卷の謄寫を終へ本年二月筑後遺籍刊行會を起し會員組織の方法を以て之れを刊行せんと欲し不敏自ら揣らす之が主幹となり筑後史談會及久留米教育會幹部の後援を得舊友宮崎來城、藤村楨堂、黒岩玄堂、大庭春峰、山田靜雄、高木惠三郎、宮原靜雄等の諸君に請うて校訂並に會計等の任を託し又東京に在りては有馬秀雄、小倉敬止、永田成美、松浦寛威、本莊季彦、宇高浩、富松金三郎の諸氏喜んで此舉を賛して入會勸誘に盡力せられたり此れに由りて幾



多の困難を排し事業着々進行し稿本校合の難易をはかり先つ上巻を出版し次いで下巻を最後に中巻を刊行することゝし余が多年の宿望漸くにして達成せられんとす真に欣喜に堪へざるなり

顧ふに今や古書の翻刻再版郷土史の編纂著述等到處に起り叢書若しくは單行本として世に現れ來るもの益々多きを加ふるの時に當り獨吾か南筑の學界に此等の著作發刊頗る寥々たるの感ありしが幸なる哉本書の刊行と相前後して米藩の儒宗樺島石梁先生歿後一百年の記念事業として其遺文出版の舉ありしは實に吾人の誇りとすべき所なり

之を要するに我筑後遺籍刊行會が第一着手として浩漭なる本書を發兌せる所以は精力絶倫にして博覽多識なりし翁の平生を江湖に紹介すると同時に郷土史研究家に對して温古知新の資料を提供し以て翁の志を繼いで拾遺補闕の念を起すの好學者を輩出せしめんとこの微衷に外ならず尙會員諸君の深厚なる同情に頼り更に繼續的に我郷先哲の遺著を刊行せんと欲す幸に之れを諒せよ

大正十五年十二月

筑後遺籍刊行會

主幹 渡邊 五郎

校閱者 宮崎來城  
藤村直之助  
黒岩萬次郎  
大庭陸太

昭和元年一月五日印刷  
昭和二年一月十五日發行

壹部上中下  
定價貳拾圓

送料六拾錢

著者	舊久留米藩士	故 矢野 一 貞
發行者	久留米市篠山町 筑後遺籍刊行會	主幹 渡邊 五郎
印刷人	福岡市博多古小路町二五	山田 純一郎
印刷所	福岡市博多古小路町二五	山田 印刷所

發行所 久留米市篠山町 久留米圖書館内  
久留米市米屋町  
筑後遺籍刊行會  
特約發賣所 菊竹金文堂



585



